1960.11.1（火）

VOCALIZE

No.48

ＡＫＣヴォーカライズ機関紙　　編集　浅井幸三

喜び

ゲーテ

泉のほとり、
色どりあやに飛ぶとんぼ。
私はもう長いこと見とれている。
濃くなったり薄くなったり、
カメレオンのよう、
あるいは赤く、あるいは青く、
あるいは青く、あるいは緑。
ああ、まぢかに寄って
あの色を見たいもの！

すいと飛んでは浮かび、
　少しも休まない。
だが、静かに！とんぼが柳にとまる。
さあ、捕まえた、捕まえた！
さてそこでよくよく見ると、
陰気な暗い青のひと色ー

さまざまの喜びを分析するお前も同じ思いを味わうだろう。

ー「小曲」より・高橋健二訳

11.月の演奏会

名古屋　◇ＣＭ◆ＰＭ■ステージ

◆秋のジャズ・フェスティバル
　4日昼二回　松坂屋ホール
◇有馬徹とノーチェ・クバーナ
　8日夜　市公会堂
◇ウィーン・コンツェルトハウス弦楽四重奏団　9日夜　文化講堂
◇ナルシソ・イエペス・ギター演奏会
　17日夜　市公会堂
◆和田弘とマヒナスターズ
　20日昼夜　市公会堂
◆晩秋のムード・ミュージック
　21日夜　文化講堂
◇豊田耕児ヴァイオリン演奏会
　24,25日夜　市公会堂
◇京都市交響楽団演奏会
　26日夜,27日昼夜　市公会堂
◇大谷冽子独唱会
　276日夜　ＣＢＣホール
◆シャープスアンドフラッツ・リサイタル
　27日昼、28,29日夜　市公会堂

Vocalize <48号>

◇ニュース・つどい案内……2
◇コーラス（会員近況）……345
[特集]　35年度ＡＫＣ発表会……6
　「あれこれ」……7　「三年生のみた…」……8　プログラム……9
◇「続・ほたる草」2（山川真澄）…10.
◇プロフィル平山葉子さん（十四）…11.
◇プロフィル小川恵津子さん（七）…12.

この欄はＡＫＣ関係者みんなの近況を知らせ合うためのものです。だれのことでも、どんなことでも、ぜひお知らせ下さい。

◇…毛利豊君（五）と南野節子さんの結婚式は、十月二十八日午前十一時三十分から、名古屋市の徳川園市民結婚式場であげられ、新しい生活へのスタートを切った。新婦節子さんは、毛利君が日清製粉坂出工場に勤務していたとき、同じ職場で働いた仲。毛利君が名古屋営業所詰めとなってから一年半、節子さんを名古屋へ迎えることになったわけ。

◇…住所変更のお知らせ

・渡辺義彦（十一）＝止宿先＝
　豊中市千里園××××

・藤野絢子（十三）
　名古屋市千種区北千種町×××

・桜山崇子（七）
　十一月中に名古屋へ帰る予定。それまで東京に滞在するが、すでに下宿は引き払い、転々と止宿するはずなので、手紙は着かないおそれが濃い。ご注意。
　名古屋市東区徳川町×××
　電話　×××

ヴォーカライズのつどい・ご案内

－東　京－

二年四カ月ぶりに、東京地区のつどいを開くことになりました。初対面の方もあるとおもいますが、名古屋地区を離れているＡＫＣ出身者が、これからも励まし合っていけるよう、皆さんの積極的なご参加をお待ちしております。

記

とき　昭和35年11月6日（日）
　　PM4時～7時
ところ　日本橋交差点西北角
　　浅野ビル地階「ロビー」
かいひ　二百円（予定）

以上

委員会（名古屋）からは浅井会長が参加する予定です。

ＡＫＣニューズ

◇…学校祭の最後を飾る体育祭は、十月二十三日に行なわれたが、文化部対抗リレーに出場した音楽部は、女子チームが優勝、男子チームも四位入賞という輝かしい記録を残し、本職の文化祭より成績がよかった？と皮肉る向きもあったほど。全般に、「ことしの体育祭は盛り上りがなかった」というのが、在校生たちの率直な感想だった。

◇…ＡＫＣでは、発表会の終わったのを機に、十月三十日に定光寺へ出かける予定だったが、雨でお流れとなった。

◇…「発表会も終わったことだし、しばらくのんびり休養を…」といっていたＡＫＣ幹部も、三年生や先輩にハッパをかけられて、ただちに練習を再開した。

私の好きな詩③

ゲーテ「喜び」

推薦者・匿名

－「喜び」とは何でしょうか－

この詩を書き送ってきた人は、たった一言、このように書いています。手にとってながめてみた「喜び」それは、この詩のいうように、あるいは「暗い青のひと色」なのかもしれません…

誕生日おめでとう（11.月）

・十一月三日　増田　禮（十三）18歳

・同　十五日　平山　葉子（十四）17歳

CHORUS

ー10月下旬分ー
（到着順）

鈴木　茂（十二）

歩く、歩く、どこまでも歩く。歩く事四十分にして遂に下宿から学校についた。運度不足を歩く事で補う生活の単調、歩くのも楽しいものだ。（カタカナを変更）

松沢　暢夫（六）

十月二日より明石工場に行っています。この工場は、本社のゴミゴミした、空気のドス黒い所とちがって芝生があり、花壇ありで、エンジンなんかを作っている工場とは思えぬ明るいきれいな所です。東京では大洋は四勝したようですが、明石では太陽がいっぱいです。長田（といってもご存じの方は少ないかもしれませんが、神戸駅のやや西方です）から明石までは電車で約二十分、名にしおう須磨、塩屋、垂水、舞子と海岸線を走るのは実によいものです。松林ごしに手に取るように淡路島をながめながら、美しいロマンスカー特急で通勤できるとは何と幸福なことでしょうか。会社についてからは相変らず軍艦のエンジンを作っています。

安田　良江（六）

日本チタンに勤めるようになってから、はや四カ月になりますが、どうにか仕事にもなれてきました。でも大ぜいの中に生活していた私ですので、今度の会社は人数が少なくって、さびしくってしかたありません。

船木　弥子（七）

ママになって半年近く、もっぱら育児に専念しております。毎日降っても照っても山ほどの洗濯、朝起きるとまず「天気はどうかナ？」晴れているとヤレヤレです。秋空をみてこれでは情けないです。ウンチをみては心配したり安心したり。まったく二、三年前まではこんなこと想像もできませんでした。ベビーにばかり気をとられ、私はすっかりやせてしまいました。会社のアパートに移ったら用心がよくなりますから、坊やをつれてゆっくり帰名したいと思っています。

志水　照代（十三）

精神的に時間が足りない。二十四時間は二十時間にも三十時間にもなると言われるが、私には前者にしかなったことがない。時間がほしい！

渡辺　義彦（十一）

夏休みごろから、音楽部が「影をなくした男」をするという話はうすうす聞いていたが、きょう、こうして書いている今ごろはそれも終わって、疲労と安心とで皆息をついているであろうとは、また奇なことである。

あれは自分も出演したものなので、なかなか思い出が深い。あの旋律は今でもほとんどおぼえていて、道を歩く際、ふっと口をもれて出る。ほんとうに良い旋律で、口ずさんでいてもなつかしさがこみあげてくるのである。僕が背広を着たのはあれが初めてで、観客席から「ネクタイがおかしいぞ」とヤジが飛んだものだ。成功を確信している。

阪大混声合唱団で歌をうたい、すこし動いているほかは、授業もおもしろくなく、単調な毎日を過している。最近どうもゆううつでいけない。何もかも、やわらかな秋の光までいやになる。しかし、そのうちにまた気分も良くなるだろう。

前のページから つづく

〃CHORUS〃

増田　容子（六）

月・金　フリー（映画鑑賞ディ）
火・水・土　ヤマハ音楽教室講師
木　江上料理学園
日　エレクトーン習いに

上記のごとく、多忙ながらも楽しく九州の空気を吸っています。

講師は九月から始めました。相手が子供であっても教えるとなれば大変。楽典を初めからやり直すやら、童謡を歌ったりひいたり、お遊戯の研究をしたり…幼いかわいらしい子供から増田センセイと言われる身となりにけり。

住めば都と言いますが、大阪・名古屋と比べるとやっぱり田舎です。洋画の数が全然少なうのが不足です。その他の点はまァまァまァ。日本語も通じますし、何処とも変わりないようです。

中尾　桂二（七）

経理部経理課から為替課へ転属（十月一日付）

最近のプラン

10月16日　京都嵯峨野へ
10月22,23日　友ヶ島へ旅行（魚釣り）
10月25日　英会話同好会のダンスパーティー
10月29日　枚方パーク菊人形見物
10月30日　8ミリ芸術祭参加作品クランクイン
11月3日　京都へ
11月6日　大阪支社運動会
11月12,13,14日　湯の山ー名古屋旅行
11月20～23日　京都紅葉撮影行。8ミリクランクアップ

鈴木　道郎（十二）

・あと四カ月余り。悲壮な思いで毎日を送っています。というのはうそで、のんびりやっています。寝て、食べて、土手を散歩して…。
・文化祭…ほっとくつもりでしたが、また病気?が出てしまいました。「現役の皆さん、よくがんばりましたネ」と、まず言っておきましょう。

二井真智子（十四）

無事に千歳高校へ入れてほっとしています。なにしろ東京は移動がはげしくて、高校の転入テストがむつかしいそうですけど、ほんとに入れてよかったと思います。入ったとたんに期末テストがあり、さんざんな目にあわされましたけど、このごろはもう学校にもなれて、楽しくすごしております。十一月二十日からは修学旅行に出かける予定です。行先は紀伊半島一周だそうです。今から胸をおどらして楽しみにしています。

高橋　昭弘（十三）

文化祭までは後輩の指導（!）に熱中。文化祭をやった三年生は入試で失敗するというジンクスがあるとかないとか…。そういう非科学的なことは信用しないことにしています。文化祭後は、一カ月後に迫った実力テスト目ざして、徹夜でスイミンをとろうと思っています。

永井　充（八）

営業写真家！　私本来の姿にやっとなり、それだけに期待するものがある反面、不安もとても大きいようです。

「見合い写真おやすくしておきます！」仕事場と寝どこが同じ建物の中の雑々で頭もゴチャゴチャ。だからフロへ入って寝ることにします。

若林　延昌（五）

毎日、音楽とケンカしています。食欲の秋…よく食べますが、相変らず肥えれません。何か妙案は？

芸術の秋…上野の美術関係館、博物館など、全部まわりたいと思っています。相棒のいないのが残念。

悩み多き秋…人生とは何ぞ。人間性は存在するのか？

千本木宣子（十）

十一月二十日に予定された研究会の準備のため、このところ忙しくて少々頭にきているようです。夏休み前から資料集めなどもぼつぼつやってはいたのですが、なかなかはかどらず、今ごろになってあわてている次第です。勤めに出ると、その職場外のことには「忙しい」を口実として、つい無関心になりがちで困っております。研究会が終るまではおとなしくしていますが、十二月からは少々羽根を伸ばすつもりです。

桜山　崇子（七）

私が名古屋へ帰ろうかナといったら、どうしたものか、急に仕事がふえました。今月に入って二晩テツヤをし、写譜屋の商売だけで多分浅井さんの一月分の給料ぐらいかせぎました。その他、音楽会をひかえものすごく忙しく、この春みたいに、音楽会がすんだら病気でもするのじゃないかと心配です。最近は断っても仕事を押しつけられるのです。芸術の秋は仕事の秋でもあるわけです。

11月1日　ヤマハ　フランス歌曲研究会　「フォーレの夕べ」

11月6日　芸大　芸術祭にてN君とデュエットに出演（私がヨソモノなのでナイショ）

11月12日　日仏学院　土曜例会にフランス歌曲の夕べ　私は放送にうたったプーランクとコーラスに出演

十月末から下宿を出て、荷物を送り返して親戚、友だちの家、先生の家の留守番と、住所不定です。とにかく十一月中には名古屋に帰るでしょう。

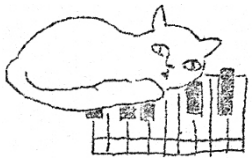
加藤幽香子（五）

会う人ごとに「お暇でしょ」と言われるので、大いに多忙であることを説明するのですけど、なかなか信じていただけないので、フンガイしています。家庭をもっている人たちはよく理解してくれますが、独身の人はいけません。いずれは忙しい日を迎えるようになるのですから、覚悟のほどを。

それでも、早いもので、もう結婚一年になろうとしています。一年目は紙婚式というのだそうです。ダイヤモンド式まで長生きしたいとは思うのですけど。

谷　美保子（十四）

久しぶりに旭丘のふんいきにひたり、そちらに飛んで行きたくなりました。学校祭の日程を見たら、またまた行きたくて行きたくて。こちらの学校生活も二カ月になり、だんだん悪いところが目立ってくるたびに、旭丘を思い出します。名古屋シックとでもいったらいいかしら。



十月三十一日までに返送されたはがきは、以上のもののほか、横橋貞雄君（十二）のみで、計十八葉でした。日を限らなかったことと、郵便の遅れなど、事情もあると思いますが、未投函の方は、必ずご返事下さいますよう、お願いします。

35年度 AKC 発表会あれこれ

批評ヲシキモノ
状況メイタモノ
ヒヤカシ
悪趣味…etc.

お好きな「メニュー」を…
…まえがき…

ことしのＡＫＣ発表会は、十月十九日旭丘高校鯱光館で行なわれた。いままでの演奏会形式に、新しくオペレッタを加えての二本立て、という張り切りぶり。…さて、その結果は…。発表会プログラムを参考に、以下の雑文および藤野さん（三年生）の感想で、当日のふんいきをご想像下さい。

この発表会に顔を出した卒業生は、浅井幸三（五）永井　充（八）、裏方に回って大活躍の鈴木道郎（十二）の三人だけ。

「ほめてほしい」「けなしてほしい」と、両様の注文があったので、今回はいままでの発表会批評とは形式をかえました。どうか、お好みのタイトルの部分を拾って読んでください。

なお、私は最近、年のせいかニブクなったので、技術的な面へはほとんど触れ得ません。あらかじめご了承ねがいます。

（あさい・こうぞう）

賛辞を心から待つ人のために…

一口にいうと、たいへんまじめなステージでした。いろいろトラブルもあったのに、それに気落ちせず、熱心に、根気よくやったものです。その努力を多とします。

驚きました。満足に舞台が進展していくかどうか、前日まで、いやその日その時まで、まるきりアテにしていなかったオペレッタが、すごいできばえでした。主役陣の力もさる事ながら、わき役に回った若手諸君のうまい芝居には、自分の目が信じられないほどでした。このまとまりは、どたんばにしてみせた精神力の強さと信頼感によるものでしょう。

演奏会部門も、オペレッタとの二本立て練習のハンディの割りには、よくがんばりました。しかし、印象としては、個人の力がチームプレーを上回ったように受け取れました。つまり、ソロの方がよく力を出していた、といえます。

事に、太田岸子さんのシロフォンは、最高のききものでした（伴奏がもう少し息の合ったところをみせてくれたら、なおよかったのですが）一見、非凡な才の持ち主とは思えませんが、自分を失わない態度、自信を持っているということは、演奏の面にもこんなの如実に表われるのでしょう。

コーラスでは、やっつけ仕事（失礼）の小規模混声が、バランスの点、曲のつかみ方からいっても、もっともまとまっていました。女声合唱では、たいへん快い発声をしてくれましたが…（あとは、この欄の担当からはずれますから省略）

酷評を痛快とする人とともに…

高飛車なきめつけ方を許してくれるのでしたら…合唱陣は総くずれに近いありさまでがっかりしました。平均した力のある、いまの部員構成からいっても、もっとうまくて自然だと思うのです。いただけないのは、曲目の選定。たしかに、こういう曲をやっていれば一日に何曲でも進んでいけるでしょうが、人にきかせるには、てんでおもしろみがないのです。

進行のまずさ。毎年のことではありますが、これがヘタだと、演奏がよくても割り引かれてしまうことを忘れていたようです。あわててピアノを動かしに出なければならぬ男声陣の苦労はわかるのです。ただ、前もって打ち合わせておけばなんでもないことを…

オペレッタで文句をつけたいのはメーキャップ。せっかくのいい顔が台なしに名って、グロテスクでさえありま

した。たくさん塗ることがメーキャップではありません（もっとも、たくさん塗ったから恥ずかしくなくなって好演できたというなら別です）

一番ハラに据えかねたのは、この日になって急にプロの順序をかえて、男声合唱を最後にしたこと。これが最良のものと自負してならけっこうですが、残念ながら…。あとのオペレッタは見ていただかなくていいです、お帰り下さい…そう言いたいのかと邪推したくなりました。

記録に多大な関心を寄せる人に…

・発表会プログラム　八ナンバーは最少記録。＝これまでの記録、最多十八ナンバー（24, 25年）　最少十ナンバー（31, 33, 34年）

・ヴォーカルソロなし、ピアノソロなしは、ともに新記録。＝これまでヴォーカルは少なくとも2人以上のソロがあった。ピアノソロは31年にもなかったが、そのかわりにオルガンソロをひいたので、今回が初めてということになる。

・シロフォンソロは31年に次いで2度目。しかもいずれも圧倒的成功をおさめた。

・女声トリオ　34年に次いでこれも2度目。

・オペレッタの上演は3度目。しかもうち2回が「影をなくした男」

・このオペレッタの動員数も、今までの最高。

・客の入り　特別に多いとはいえないが…。

ヤジ馬根性を愛する人にささぐ」…

◇「舞台の上で、紙きれを持ってウロチョロして、みっともないなァ、ピアノを出す位置ぐらい、一々控えを見なくてもわかるだろうに」（佐藤部長、ピアノのそばで紙きればかりのぞいているので）

◇「曲の解説っていうのは、文を読んだってダメなんだよ。結局話す人に個人的魅力がなきゃ、きいてくれないネ」（せっかくの伊藤さんの解説文も生かされず）

◇「コーラスが中心で、ピアノの位置をかえにきながら、譜台を出しっぱなしで帰るなんて、ヘマだなあ」（かげの人、鈴木君たまりかねて飛び出して持ち去る）

◇「アッ、音をとらせておいて、列に戻らないうちに振るとは……」（平山さんあわてる。矢野さんあきらめて次から戻らず）

◇「アンコールの拍手をしているんだゾ、アナウンサーを呼んだんじゃない」（シロフォンのアンコール要求、無視される）

◇「このコーラス、指揮者を見せるのかナ」（岡嶋君大奮闘、笑声、拍手、大人気）

◇『初めからやり直します』の舞台からの声に「ピアノを叩いて、満足に音も出せないとはナサケない」（男声合唱大混乱。つぎから矢野さん、出たりはいったり）

◇「折角、こんなに拍手しているのに、幕がしまるまでにお辞儀したのが一人だけとは、まるで愛想のないオペレッタ役者だなァ」（朝日君だけ頭を下げる。あとは棒立ち……さては感きわまったか）

◇「旭丘少女歌劇…の名前、返上できるネ」（オペレッタ意外の好演に…あさい）

◇音楽部ってどうしてこう、かわいい子ばっかりそろってるんだろう。うれしくなっちゃう」美人を写すのが好きだから…ながい）

＜記者席選定・表彰選手＞

・監督賞　鈴木道郎　・殊勲選手賞　太田岸子　・優秀選手賞　平山葉子

・美技賞　岡嶋　孝　・敢闘賞　伊藤真知子　矢野公子

発表会予想「山カン先生まかりとおる」ご希望の方にお目にかけます。あさいまでお申し越し下さい。

楽しいふんいきを出す
…さすがは、わがクラブ…
三年生の見た発表会

サンマを焼くにおいのする道を、げっそりしてわが家へと急ぎました。ちょうど自分の舞台が終わったときのようなものです。

今までにない悪い前評判に「一体どうなることやら。いっそ、だれも見にこなければよいのに」とまで思っていました。この心配をみごとに吹き飛ばしたのは、やはり皆の心が一つになった以外の何ものでもないでしょう。

オペレッタという催しが興味をひいたのか、すばらしい観客の入りでした。器楽演奏までの歌は、きつく言えば、文句のつきそうなできぐあい。それをぐんと引き締めた村上君と太田さんはお手柄でした。盛り上りのない合唱で最も目立ったのは、三年の岡嶋君が指揮した小規模合唱でしょう。からだ全体で歌い手を引いていった彼はさすがだと思いました。合唱で拍手の多かったのもこれだと記憶しています。

みんなが気をもんだオペレッタは、実にみごとだったと思います。技術的には、とにかく幼稚でまずかったかもしれませんが、「音楽部とはこんなに楽しいところです」といっているような、あたたかなオペレッタでした。これこそ真の音楽部発表会といえるでしょう。昨年の発表会が声量の豊かさ（私ども三年はこう思っておりますが）を見せたとするならば、ことしの部は、音楽部のふんいきを十二分に他のクラブ員に見せたと思いますが、いかがでしょうか。

「本番が最高のできだった」と出演者は言っております。私は、このことばをまったくすなおに受けることができました。あれだけのふんいきを作り出したとは、さすが、わが愛する音楽部だと思い、とてもうれしい感じでした。

平山さんの安心してきけるピアノ伴奏、高橋君、安田君などの三年の出演、特に勉学に忙しい（私もそうでなければならないんですが）鈴木道郎さんの熱心な指導、と、ことしの発表会はＡＫＣ総出演といえるでしょう。

最後に、私の友人町田万里子さんの数多いお手伝いのあったことをお知らせして、私の今回における感想の筆を止めたいと思います。

（藤野　絢子）

ＡＫＣオペレッタ・上演記録

堀内秀治作曲　「影をなくした男」（3幕4場）

とき　昭和35年10月19日
ところ　旭丘高校・鯱光館

スタッフ

演出　佐藤　征夫
装置　朝日　裕晶
衣装　矢野　公子
照明　鈴木　道郎
ピアノ　平山　葉子

キャスト

ペーター　朝日　裕晶
ペルシャ人　伊藤真知子
伯爵・肉屋　村上　賢一
老婆　矢野　公子
伯爵の娘　池谷　芳子
伯爵家の客　大島　修
果物屋　三浦　静
雑貨屋　鬼頭香糸子
合唱　ＡＫＣ合唱団

（注）鈴木道郎君（卒業生・十二期）の名は、当日公表されていないが、すべての面において預かって大いに力があったので、ここでは照明担当として記録しておく。

1960.10.13 昭和 35 年度 於・旭丘高校鯱光館
AM 11.00ー

旭丘高校音楽部発表会

1.	混声合唱	村 の 風 車	ビゼー	
		（「カルメン」間奏曲より）		指揮　平山　葉子
		聖　　潔	賛美歌　番	ピアノ　矢野　公子
		礼　　拝	賛美歌　番	
		若者よ（仕事の歌）	ロシヤ民謡	
		かもめに寄す	(編)別宮貞雄	
2.	女声三重唱	ロ ー レ ラ イ	ジルヘル	S.　森谷　町子
		祝　婚　歌	ワグナー	MS. 西依キミ子
		浦のあけくれ	マジンギ	A.　鈴木由紀子
				ピアノ　加藤久美子
3.	ヴァイオリン独奏	ヴァイオリン奏鳴曲第５番ヘ長調		
		op.24 「春」第１，第３楽章	ベートーヴェン	村上　賢一
				ピアノ　平山　葉子
4.	女声合唱	森 の 夜 明 け	中田喜直	指揮　伊藤真知子
		ラ・クカラーチャ	メキシコ民謡	ピアノ　矢野　公子
		かあさんおねがいよ	（編）中田喜直	
		峠 の わ が 家	アメリカ民謡	
5.	混声合唱	波　浮　の　港	中山晋平	指揮　岡嶋　孝
	（小規模編成）	野　の　春	スェーデン民謡	ピアノ伊藤真知子
		赤　い　靴	本居長世	
6.	混声合唱	ペトルスとマルーシャ	ウクライナ民謡	
		秋　の　月	滝廉太郎	指揮　村上　賢一
		噴　　水	スェーデン民謡	ピアノ伊藤真知子
		曙　の　歌	グルック	
		チリビリビン	ペスタロッツァ	
7.	シロフォン独奏	峠 の わ が 家	アメリカ民謡	太田　岸子
		チゴイネルワイゼン	サラサーテ	ピアノ　宮部杏子
8.	男声合唱	た　か　ね	マラン	
		ま こ と の 愛	ドイツ民謡	
		静かに流れるアフトン川	アメリカ民謡	
◎	オペレッタ	「影をなくした男」	（詳細　別掲）	

（注）　当日は、プログラム 5 と 6 の間で 20 分、同 8 とオペレッタの間に 40 分のそれぞれ休憩があった。終演は PM 2.45

続・ほたる草　2

山川　真澄

私はいつもの裏山に行ってみたくなった。弓川の流れをさらさらと足もとにききながらそのまま月の落ちた坂道を登った。家に帰るよりも裏山に登った方が真弓に近づけるように思えた。そして、それはその通りだった。この前と同じように真弓は後からついてきた。ひたひたひた……。亡き妹の小さなわらぞうりの音が私についてきた。私の靴音に消されそうなその足音をよく聞こうと立ち止まると、真弓も止まった。ふり向くと、私を見上げてだまってにっこりする真弓の顔が頭に浮かんだ。私が歩き始めたら亡き児の足音もまたついてきた。

裏山の古い切り株に腰をおろしたら、真弓が生き返ったように、昔のなつかしい思い出が、亡き妹のおもかげが湧き上がってきた。

真弓は、色白ではあったが割に肥っていて健康そうな体だったのに、病弱な子だった。別にどこが悪いというのでもないのに、よく熱を出したり、おなかをこわしたりして病床にいる日が多かった。だから学校を休む機会も多かったが、成績はいつも一、二を争う上位にいた。自分の病弱が身にしみて感ぜられたからか、あの白衣にあこがれてか、大きくなったら看護婦さんになるのだといって一生懸命勉強していた。小さな真弓にも、病人を守り助ける人の尊さはわかっていたようだった。学校を休んでいる間は、いつも私がその勉強を見る役目だった。私の小さかったころは、真弓とは逆に勉強などしたことのない腕白小僧で、宿題をする間もまどろっこしく遊びに出ていたのに、真弓は野山を駆けまわる健康に恵まれず、もっぱら机にかじりついていた。身体では心配させても、その点では両親を喜ばせた。

そんな病弱な真弓を少しでも健康にしてやろうと、両親も私も一生懸命だった。両親は栄養に気をくばり、私は気候のよいときは毎朝わずかな散歩につれて出たりした。もちろん真弓自身も丈夫になりたい一心で、軽い運動をしたりしたが、ちょっと寒かったり、ちょっと度がすぎるとすぐ病床の人となった。だから私たちは真弓の健康については、思いのほか気を使った。

とりわけ悪いところのない真弓の病気は、実はそう軽く考えられるものではなかった。医師の見立てでは、真弓は二十才までの生命しか持っていなかった。特に悪いところもないのにおかしな話だったが、それ以上生き続けるにはあまりにも弱すぎるというのが医師の言だった。しかし、私はそう考えたくなかった。このヤブ医者めが何を言うかといいたい気持だった。両親とて同様だったにちがいない。もちろんそんなことを知らされていない真弓は、看護婦さんの白衣をまとう日を夢見ていた。真弓の寝顔を見て、そっと涙をぬぐう母を、私は何度見たことか。「真弓よ、生きてくれ」と願わずにはいられなかった。真弓自身のためにも、母のためにも、そして私のためにも…。

その真弓が、医師の見立てをやっと半分生きただけで世を去ってしまった。私の、父の、そして母の切なる願いもむなしく…。真弓の化身のような白衣の看護婦さんに見守られながら…。私たちのところから、母なるほたる草のところへ行ってしまった。

掲載号

ほたる草（1）26号・33年10月
（2）27号・33年11月
（3）29号・34年1月
（4）30号・34年2月
続ほたる草（1）43号・35年4月

招待席 C

日本フィルハーモニー交響楽団演奏会

（10 月 22 日・市公会堂）

日本フィルが初めて、音協以外の主催で名古屋で演奏会をした。そして「第一回定期」と銘打ったのだから、あわてたファンもいたことだろう。音楽界も、利害がからむと、いろいろと複雑らしい。

「招待席C」のメンバーは、予定した線がくずれて急にゲストとして迎えた永井君を含め、上前さんとの八期組、かたわらに田中蓉子さん（六期）もひょっこりと並び、新人編集員を応援の浅井委員も加わるにぎやかさ。

予想外に客席の入りは悪く、日本フィルの人気も名古屋では伸び悩んだ格好だった。雑然としたプログラムのうち…批評家筋はペールギュントを推していたが、この日集まった面々は、ペールギュントをつまらなかったと一蹴し、批評家以上の識見（かどうか）を誇って解散した

参会者
招待者　上前　佳子（八）
編集部　永井　充（八）
神藤　敏子（十二）

プロフィル

皆さんの中で、彼女の、あのピアノをご存じない方はないだろうと思います。「彼女のピアノを聞かずして、ピアノを聞いたと言うな」といわれるほどですから、まだのお方は、ぜひ徳川園のあたりを散歩されることをおすすめします。静かな屋敷町の、殺風景な道ばたで、どこからともなく、ショパンの即興曲が…といったぐあいです。

彼女を見た人は「なんとしっかりした、完全無欠な……」と思われることでしょう。あまりに理知的で、また潔癖である彼女は、それゆえに後輩に、同輩に、ビシビシと手きびしい意見を発表するものですから…彼女のフェイスも、多分に影響しているかもしれませんが…今年の四月、一年生の男子に「モシモシ、三年生のかた…」と言われた。というようなエピソードも少なくありません。（一年生が間違えるのも、無理はないと思いますが…コレハ、ナイショ）

しかし、彼女と知りあってから、はや六百日になろうとしている私としては、彼女がかわいそうで仕方がありません。彼女が合唱の指揮をすることに猛反対したのも、もちろん私です。（もっとも、今になってみると、彼女が指揮をしていて、大へん良かったと思っていますが）

「なぜ?」とお聞きになる前に、彼女と、一度ゆっくり話してみてください。「なんと優しく、甘えっ子なお嬢さん」と、あらためてお感じになることと思います。

彼女いわく、「女性はやはり、女性的で、自分のおかれた立場を考えていかなくては…」このような彼女が、どうして近づきにくいとか、年上に思われるのか…考えてみるに、結局、彼女があまりに才媛であるから、ということに落ちつきました。

今ごろ、彼女、クシャミが出て、ピアノのレッスンができないとかわいそうですから、この辺で……。

本年度優秀選手賞？に輝く

平山　葉子 さん

ひら やま　よう こ

（14 期）

プロフィル

悠々たる「エッチャン」先生

小川恵津子（おがわえつこ） さん

（七期）

言うまでもなく、彼女は、旭丘高校の小川卓爾校長先生のご令嬢である。しかし、彼女は少しもブッてなんかいない。だから、小川さん、なんていうより、皆から「エッチャン」の愛称で親しまれている。

お父様に似て、どこにいてもすぐ見つかってしまうくらい大きく、悠々としている。あまり悠々としすぎて、わたしたちの集まるとき、三十分ぐらい遅れて到着するのは、たいてい彼女である。もうこないのかと思っていると、大きい体を小さくして、「ゴメンネェー」といって、かけ込んでくる。その姿を見ると、怒れなくなってしまう。

また、とてもあわてん坊で、ときどき失敗もする。お茶目で明るく、いつも楽しいふんいきを作ってくれる。また、ときには、いともおしとやかに語り合い、真剣に相談にも乗ってくれる。いつも品位を失わない、明るさと親切な彼女は、やはり「エッチャン」と呼んだ方がピッタリする。

いまは、付属小学校のりっぱな音楽教師。さぞエッチャン先生の授業は楽しいことだろう。「町を歩いていると、ずっと遠くから「小川先生！」と大きな声で生徒に呼ばれ、赤面することがあるワ」といっているし、私たちも、一緒に歩いていると、彼女の前へきてペコンとおじぎして「先生コンニチワ」とニコニコしている子に会うことがあるから。きっと、学校でも、皆に親しまれる先生だろうと、彼女のお人柄がほほえましくなる。

彼女に幸多かれと祈っています。

まったく、七期の連中はよくもそろったものだ。この人たちとバッタリ路上で会ったりしても、すぐにペースにのせられて、とたんに陽気にさせられてしまう。そのなかでもとくに目立つ（大きいから）小川さんは、名も知らぬ人と引き会わせても、いつかドコソコデ……というぐあいで、秘密を作れない。

Invention

○…たくさん文句をいってもらうつもりで、先月はがきをどうふうしましたのに、約三分の一の回収率。あとの三分の二は、ぜひ十一月二十日までに、近況報告を兼ねてご返信ください。

○…でも今月は、ごきげんなのです。ごらんのとおりの十二ページ、しかも皆さんの手による充実した内容です。会長たるもの、あまり紙上でグチをこぼすな…という批判もありましたが、そうした弱みを察して、さっそくご援助くださった方々に、お礼申し上げます。ことに、「コーラス」欄へ掲載するな、という注釈付きで、励ましやら慰め、さらにはうれしいことばをお寄せいただいた方が、二、三にとどまらなかったことをご報告し、謝意にかえます。

○…先月号を出すにあたって、実は、十四期の人たちにたいへんねばられ、かつまた、ハッパをかけられたのです。「とにかく発表会に間に合わせてほしい」という申し入れに、どうも女性にヤサシスギル私としては、大いに責任を感じたのです。…これが「Vocalize」軌道に復す、の真相です、十四期諸嬢は、「私たちの力なり」と喜んだことでしょう。

1960.12.5（月）

VOCALIZE

No.49

ＡＫＣヴォーカライズ機関紙　　編集　浅井幸三

落葉

ポオル・ヴェルレエヌ

秋の日の
ヰオロンの
ためいきの
ひたぶるに
身にしみて
うら悲し。

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
涙ぐむ
過ぎし日の
おもひでや。

げにわれは
うらぶれて
ここかしこ
さだめなく
とび散らふ
落葉かな。

―上田敏「海潮音」より

Vocalize
<49号>

◇ニュース・案内……2
◇コーラス（会員近況）……3
◇「合唱団についての私の意見」
（森本　進）……4
◇「続・ほたる草」（山川真澄）……6
◇プロフィル高橋洋子さん（十二）…7
◇プロフィル毛利　豊くん（五）…8

12月の演奏会

名古屋　◇ＣＭ◆ＰＭ■ステージ

◆石井好子シャンソン・リサイタル
3日昼　市公会堂
◇ＣＢＣ合唱団第六回演奏会
4日昼　ＣＢＣホール
◇日本の音楽家たち
名古屋シティ・コーラス、水野俊彦など
8日夜　市公会堂
◇ジークフリード・ベーレント・ギター演奏会
9日夜　ＣＢＣホール（音楽サロン）
◆ゴールデン・コンサート　イベット・ジロー、ヘレン・ナリル、デル・ルビオ・トリプレット　10日昼夜　文化講堂
◆リリオ・リズム・エアーズ・ミュージカル
10日夜、11日昼夜　市公会堂（労音Ｃ）
◆芦野宏クリスマス・シャンソン祭り
13日夜　市公会堂（友の会Ｂ）
◇イスラエル・フィルハーモニー交響楽団
演奏会　14日夜　市公会堂
◇スコダ、ヤンソンス　東京交響楽団演奏会
16日夜　文化講堂
◇桐朋学園オーケストラ演奏会
19,20日夜　市公会堂（友の会Ａ）
◆南里文雄とホットペッパーズ
21日夜　文化講堂（芸文）
◇巌本真理ヴァイオリン演奏会
22日夜　文化講堂
◇ステファン・ルーハ・ヴァイオリン演奏会
23日夜　市公会堂（労音Ａ）

…2ページ下段につづく

この欄はＡＫＣ関係者みんなの近況を知らせ合うためのものです。だれのことでも、どんなことでも、ぜひお知らせ下さい。

クリスマス・うたのつどい・ご案内

名古屋

恒例のクリスマスのつどいは、今年は十二月二十五日（日）午後＝会場は旭丘高校音楽室の予定＝行なうことになりました。

年忘れの意味を兼ね、加えて旭丘音楽部の現役と卒業生の顔つなぎもしようという、いたって欲ばりな、ヴォーカライズのつどい年末版です。

詳細は、森本副会長を実行委員長に、ＡＫＣ側とも打ち合わせ中で、十五日までにはがきにてご連絡いたします。ぜひ万障繰り合わせって（忘年会やデイトも断って）ご出席たまわりますよう、委員一同お待ちしております。

なお、連絡には往復はがきを使用、コーラス欄にも活用させていただきますのでご協力下さいますようお願いします。

◇…東京地区ヴォーカライズのつどいは、十一月六日夕、日本橋「ロビー」で開かれた。若林（五）桜山（七）石井（九）東堂（十一）横橋（十二）二井、山崎（十四）の在京七会員二、名古屋から浅井（五）が加わって、なかなかの出席率。各会員の近況や思い出話、さらにはヴォーカライズの夢にまで話は及んで活況を呈し、八重洲口「太陽」で食事をともにしてから参会したが、まずは成功のつどいだった。

◇…桜山崇子さん（七）は、十一月二十日帰名、いまは午前中、お兄さんの病院の手伝いをするかたわら、家事を切り回し、レッスンもとるという多忙さ。しばらくは音楽はつけたし程度の生活になりそうだという。桜山さんを迎えての七期生の集まりは、十二月三日夕、栄町「タチソウ」で行われた。

◇…二井真智子さん（十四）は、修学旅行で十一月二十日から三泊四日で南紀めぐり。第一日に名古屋で乗りかえたが、わずか十四分の忙しい乗りつぎ時間だった。

◇…十二月の名古屋音楽界は、案内欄どおりの盛況ぶりだが、ヴォーカライズ関係では、二日に愛知県立女子大学合唱団発表会（大橋）三日には幸声会発表会（若林、上前、石井）と内本実門下生発表会（水野俊）があった。また、八日（PM6.30 市公会堂）には「日本の音楽家たち」と銘打って、日本の作曲家の数々の曲が地元演奏家の手によって披露されるが、これには水野俊彦君のソロ、名古屋シティコーラス（加藤、上前ら）の合唱がある。

◇…旭丘高校の学力テストは、十二月一日から六日まで行なわれ、このあとクラス対抗の競技が始まる。

◇…ヴォーカライズの十二月定例委員会は、十日（土）PM3.00 から浅井会長宅で。クリスマスのつどいなどについて話し合う。一般会員の参加を歓迎。

12月の演奏会　（つづき）

◇名古屋放送管弦楽団ポップ・コンサート
23日夜　文化講堂

◇東京コラリアーズ、ビーネ重唱団演奏会
24日夜25ニチ昼　市公会堂（労音Ｂ）

◇名古屋少年少女合唱団Ｘマスコンサート
24日昼　市公会堂

誕生日おめでとう（12月）

・十二月八日　矢野　公子（十四）17歳
・同　十日　安田　軍二（十三）18歳
・同　十二日　足立　孝子（六）25歳
・同　十六日　加藤幽香子（五）26歳

CHORUS

ー11月上・中旬分ー
〈到着順〉

小出　幸子（十二）

最近、あまり名古屋へ行かず、文化祭もクラブの方からお知らせを受けながら失礼してしまいました。去年は台風で中止になり、今年はよけいに楽しかったことと思います。

大橋　佑子（十）

十月三日から二週間、富士中学へ教生に行きました。久しぶりに童心にかえって**I am a girl.** などと真顔でしゃべっている自分が、まったくかわいく思えました。また、中学一年生の生徒ってこんなにも純真で、愛らしいものだということも初めてわかりました。お別れのとき、ちょっぴりオセンチになったのも無理からぬことと思いました。

遅ればせながら、わが県立女大合唱団も第一回の発表会をすることになりましたので、何やかやと忙しくて、大好きな旅行もとうとう来年まで延期というしだいです。一番の悩みの種は、練習時間の少ないことと、学校祭と重なって部員が集まらないこと、資金難との三つです。でも「アンズルヨリウムガヤスシ」です。とにかく、十二月二日**PM6.30** より中区役所ホールでやりますからよろしく。

水野　公子（十三）

私は四月から水野俊彦さん（六）の授業を受けておりますが（定時制二年の授業）九月の中ごろにペーパーテストとコルユーブンゲンの試験がありました。前者だけ受けました賀、何とあわれ**73** 点でした。水野さんに、入試にはこんな問題も出るといわれてがっかりし、またがんばらなければと思いました。得意な音楽でこうですから、他の教科が思いやられます。

森本　進（十）

教生はたいへん愉快でした、ワタクシの教えたのは三年生ですので、とってもかわいらしくていいです。毎日ずいぶん幼稚な遊びをやらされました。しかしやたらにくっつきたがりますし、きれいすぎる手でさわられますので、服がむちゃくちゃになりました。この服を、学校へせんたくの講習にきたオッサンが、なんとガソリンで洗ってくれましたけど、大丈夫なもんですかね。洗ってくれた当初はくさくてくさくてしようがなかったですが、今はもうにおません。しかし、そのうちにアナがあいちゃうのとちがうかと心配です。教生が終わったら遠足に連れていってくれましたが、なんとこれが矢田川。がっかりしましたね。家のすぐそばなんですから。あったのは枯れ草と粘土とごみがたくさん。流れる水はものすごくきれいすぎました。

鈴木　道郎（十二）

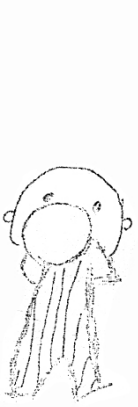
・あまりのんびりしてられなくなりました。その実、勉強はそんなにしてませんが。

・このごろ、土手までの散歩を朝晩二回必ずしています。晩秋の濃尾平野、趣があります。

・お天気のいい午後、土手の斜面にあお向けに寝っころがると、もう強くない日差しに、また遠くの山波（養老か鈴鹿か…）のくっきり見えることに、また稲が刈り取られて、そこだけ薄黒く、何もないことに秋の終りを感ずるのです。

・十二月は恒例のうたのつどいがあります。年に一度のことです。卒業生の皆さん、今年はそろって出席しようではありませんか。とくにオトシヨリの方にお願いします。

合唱団についての私の意見



森本　進

最近、合唱はますます盛んになってきており、学校に、職場にと、あらゆるところに合唱団ができてきている。その合唱団についていろいろな人と話し合ったのだが、どうも私には納得のいかないことがある。それをここに述べて、これに対するご意見を伺おうと思う。ここで述べるのは、一般の合唱団の話である。

名古屋には、いくつかの一般合唱団がある。（一般合唱団というのは、合唱コンクールに一般の部で出場するところをさすものとする）それらの合唱団について要求される第一のことは、「だれでもが気軽に行って歌える」ということではないかと私は思う。一般大衆から団員を募集するのであれば、高度な声楽的技術を要するような指導はすべきでない。「その日の勤めで疲れた心身を、自分の好きなコーラスによって和らげ、生活にうるおいと調和を持たせることが合唱する理由だ」という人が多い。そういうことを目標にするのであれば、個人練習までして追いまくられては、かえって疲れるし、うるおいどころではなくなるから、こういった合唱団では、そんな練習を行なうべきではない。要するに、だれでも歌えるやさしい歌を楽しく合唱できればそれでいいのであって、それ以上はあまり大きく望まない方がいいと思う。「楽しむ」ということを私は重視したい。練習場にはいったら、その日に起こったいやなこともすっかり忘れて、楽しく合唱できるというふんいき。これがさきの目標を達成するための決定的な要因であると思う。

この意味で、私はグリーンエコーや労音の合唱団を大いに買いたい。私はグリーンエコーの団員なので、自己弁護のようでいささか気がひけるのだが、このグリーンエコーに対して「人数が多すぎるから減らせ」とか「指導がなまぬるい」とか「しまりがない」とか「学閥がある」とかいう人がある。こういう批評は、さきに述べたような理由から、みなまちがっていると思うのである。人数など、いくら多くなっても、わたしはかまわないと思う。合唱の好きな人は、だれだって歌えばいいのである。手きびしく指導すれば人数は減るにちがいないが、それでは楽しみがなくなる。学閥というのは何のことかわからない。男声に名大生または卒業生が多いことをいうのかもしれないが、これとても後述する幸声会にくらべれば問題にならないのである。

しかし、こういう合唱団では、たるくていけないという人も多いだろう。もっと本格的な合唱がしたいという人には、そういう人向きの合唱団がある。そういうものを、私はセミプロフェッショナルな合唱団と呼ぼうと思う。ここでは、ほんとうに合唱の好きな人でなければいっこうにおもしろくない。コンクールだ、発表会だといって、猛烈に練習を行ない、個人練習までするところもある。変な声を出せばしかられる。こうなっては、もはや一般大衆のものではあり得ない。然し、ほんとうの合唱は、こういうところでなくてはできないようである。名古屋では東海メールクワイヤー、幸声会がこれである。今年の中部合唱コンクールでは、これらが一位、二位に入賞した。両方ともに、たいへんすぐれた合唱団であるが、こういう傾向をグリーンエコーや労音などに望むのは、やはりまちがっていると私は思う。

要するに、合唱団には二つの種類があって、ひとつはだれもが歌えるような一般大衆のための合唱団、もうひとつは、そういう合唱団ではあき足らずとする人たちが、ほんとうの合唱をせんとする

セミプロの合唱団である。これらは二つ併存すべきであって、どちらか一方の傾向にまとめてしまおうとはすべきでない。

最後に、今年のコンクール（中部）で二位になった幸声会について、私見を述べたい。これははたしてコンクールに歓迎できるものであろうか。ここは、はなはだ門が狭く、団員はほとんど学大の音楽科の学生、卒業生で、学大以外のものは一人もいないはずである。音楽科であればうまいのはあたりまえで、こういうところがコンクールに出てくることに私は疑問をもつのである。全国そこら中の音楽を専門にやっている人たちの合唱団が、コンクールに出てくるようになっては、合唱コンクールの意義がなくなってしまうのではないかと思うのである。

あさいこうぞうカラノオ願イ

50号とプロフィルと

…本来ならば、皆様ひとりひとりに、お手紙して、いとも、丁重にお願いすべきではありますが、ご承知のとおり、私事まことに多忙な私のこと、残念ながら、その暇がありません。それで、殺風景な印刷物で、このとおりお願いするのです。だから、これは、私からアナタへの、公明正大なる「ラブレタアー」であります…

（前文カタカナ。読みにくいので直した）

今月の「Vocalize」の第一面をごらんになって、すでにお気づきの方も追いでしょうが、今月号で第49号になりました。…つまり、来月の「Vocalize」は、すなわち新年号であると同時に第50号という、記念すべき月になるわけであります。

一口に50号と申しましても、それがなまなかな数字でないことを、「気弱く、気強く」ヴォーカライズのために、この私とともに歩んでくださった皆さん方は、よくご存じだと思うのです。

そこで、折しも新年号にも当たることでもあり、コタツにあたりながらノンビリと読める、ズッシリとした記念号を出したい、ということになりました。

どうか、一言ずつでけっこうです。「50号に寄せて」の、皆さんの感想、思い出、これからの希望をお書きください。そして、「Vocalize」の紙上に、いろどりを添えていただきたいのです。

もう一つ、お願いします。

その50号の「プロフィル」に、みんなの知っている顔、が登場することになりました。ボク、浅井幸三…のプロフィルであります。

みんなのことばかりアゲツラッテ、自分のことを載せないのは卑怯じゃないか…との一部の声に、押し出されたわけであります。

私は、いままでの、ほとんどの人の「プロフィル」記事に関与した責任と罪ホロボシのために、いさぎよくも、皆さんの裁断を受ける決意を固めました。

わるくち、欠点、珍談奇談ナドナド、皆さんの「ズバリ物申す」をお待ちしております。

…以上、「Vocalize」編集者トシテデハナク、あさいこうぞう個人として……

続・ほたる草

山川　真澄

腕時計の音が耳につくほどのあたりの静けさと、気流の関係とで、この山の上まで弓川のささやきが聞こえてきた。そして、その流れまで目に見えるようだった。そちこちで大きな石を越えた水が、ほんの一尺か二尺、小さく滝のように流れ落ちていた。壺のように深くなった底の砂の一粒一粒が目にはっきり映るほど清く澄みきった冷たい水の中に、空気が泡になってまき込まれて踊っていた。早く元のところに帰ろうと浮き上がってくると、途中でまた水につられて深く沈んでいった。何度も何度もぐるぐると浮き沈みをくり返して、彼らはついに望みを果たして水面に浮かび出て、そして、ぽっかり割れて元の姿になるのだった。

私は、はっと我に気付いた。水中に引き込まれた気泡でさえ、何とかして外に出ようと、もがきもがいて、ついには水面に出てくるではないか。それなのに私は、その気になりさえすればとうに立ち直っていられるのに、わざと自身を悲しみにひきずり落としていたではないか。悲しんでいる、さびしがっている自分を外からみて、楽しんでいたのではないか。自己を悲境におき、自己をあわれみ、同情し、それを楽しんでいたのかもしれない。悲しみとあわれみの境地に陶酔していただけのことで、ほんとうに真弓を愛し、名残りを惜しんでいることとはもう遠ざかっていたのかもしれない。悪くいえば、真弓の死をそんなふうに利用していたのかもしれない。郷里に着くなり、日の落ちた山道を、何もここまで登ってくることはなかったのだ。何が私をここまで連れてきたのだろう。さびしく美しかった誘蛾灯の紫だったのだろうか、汽車の赤い尾灯だったろうか、それとも夕焼け空と黒い山並みのあまりに美しかったコントラストだったろうか。あるいは、それらに刺激された、私のセンチメンタリズムだったかもしれない。亡き妹への郷愁というより、自身のセンチメンタリズムへの欲望だったのかもしれない。私はやっとそれに気がついた。

私は水中の気泡に救われた。思い直して山道を下りる私の耳には、もう真弓の足音は聞こえてこなかった。立ち止まって振り返っても、真弓の姿はなかった。そのかわり、振り返らなくても、いつでも私の胸の中に真弓の笑顔だけが残った。白衣を着て、腰までとどく長いおさげ髪に白い大きな帽子をつけた真弓の笑顔が…。まん丸い目で私を見上げて「お兄ちゃん、真弓だってくよくよしていないよ。こんな笑顔でいつでもお兄ちゃんを見ているよ」といっている真弓の笑顔が…。私は物の怪をはらわれたような、軽い明るい気持になって、真弓と長く暮したわが家へと下った。「悲しんで真弓が帰るのならいくらでも悲しもう。しかし、どんなにしても帰らないものなら、もう悲しむまい」

生き返ったような気持で山を下る私を待つわが家の灯が、目にほのぼのと映った。誘蛾灯の紫もさびしくなかった。空一面の星もただただ美しかった。夏とはいえ、日の落ちた信州の山道は肌寒いほどだった。きのうまで、いや、きょうのお昼までいた東京のじっとりとする、むし暑さが、まったくよそごとのように、うそのように感ぜられるすがすがしい宵だった。そして私の心の中は、たった今までのじめじめした暗さをさっぱり捨てた明るい夜明だった。

あたりに咲き群れたほたる草が、空一面の星明かりに照らされて、私に美しくささやきかけてくれた。私は星明りのほたる草の美しさを、いまさらながら味わ

った。登るときの足の重さにひきかえ、山路を下る私の足どりはとても軽かった。

（おわり）

私の好きな詩
ヴェルレエヌ「落葉」

森本　進

僕は大体詩なんてものを本気になって読んだことがない。教科書に出てくるとしょうがないから読んだくらいのものであるので、好きな詩も何もあったものではないのである。しかし詩を読もうと思ったことは一度だけだけれどある。それは中学三年のとき、国語の先生が僕ら十人ぐらいに詩を教えてくれたときのことである。そのとき、この「落葉」などたくさん教わったのだが、あとは皆忘れてしまった。僕は当時、「山のあなた」さえ満足に知らなかったのに、その場にいた連中は実によく知っていて、詩の批評だのその作者の傾向だのを話し出した。そして僕はこの「落葉」についての感想を求められたが、ずいぶんへんちくりんなことをいって恥ずかしい思いをした。そのときに、「こいつはいけません」と思って読もうという気になったのである。しかし結局はヘッセの詩集も買ってツンドクに終わってしまった。以上のようなわけで、この「落葉」は一番うらみの深いやつなのだが、詩というとこれがすぐ頭に浮かぶ。

プロフィル

いま名大混声で活躍している高橋洋子さんは、その名前（太平洋の洋）のごとく気持ちがずいぶん大きい。気持ちというより考え方が広いのかもしれない。…よい意味でも悪い意味でも…。

のんきなところがある。以前、友だちとあるコンサートへ行ったときのことだ。時間に遅れそうだからと、友だちに急がされ、二人でフーフーいいながら走ってようやく会場へ着いたら、コンサートはその翌日催される予定だったという。少しも自分で考えてもみないで、黙ってついていくあたり、日と時間に追われる凡人とはスケールがちがう？のかもしれない。

この写真では肥えて写っているけれど、実際はたいへんスマート。しかも非常におとなしい。そのせいか、はじめは少し話しにくい。話し出せば、ごく一般の女性らしく、よくしゃべり、また楽しいふんいきを自然に作り出す。

友人に対しては、なれなれしい態度を示さないところがうかがわれる。そして、きびしい批判をすることもある。然し、その奥にあるものは、優しさと情の厚さ…。小さい子供に対する態度には、そうした内面の優しさが十分に出ている。

高校時代（といっても八ヶ月ほど前までのことだが）についていえば、地味な立場ではあったが、常にクラブに対する協力ということを忘れない人だった。オペレッタにも出、発表会でもピアノ伴奏を勤めたのに、あまり表面に出なかったのも、彼女らしい存在ぶりだった。

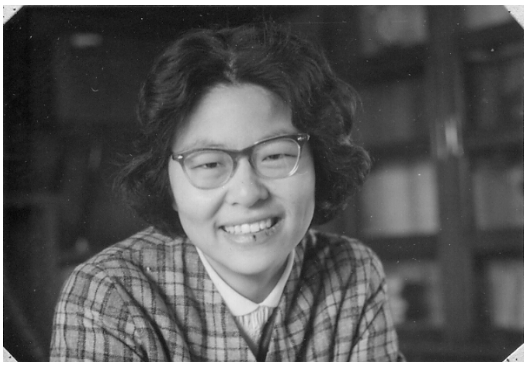
奥ゆかしいその彼女も、思わぬところで情熱的だ。「理性」と「情熱」との相反した二つの性質を持ち合わせている所に、人間的な味があるのであろうか…。

広い考えときびしい批判

高橋　洋子 さん

（たかはし　ようこ）

（12 期）



プロフィル

ＡＫＣのよろず相談所長

毛利（もうり） 豊君（ゆたか）

（五期）

毛利豊君は、高校二年のとき旭丘へ転入してきた。そして、卒業と同時に四国の坂出に勤めたので、彼のことを知らない人も多いだろう。・・・しかし、同時代のＡＫＣ部員ならみんなに好かれ、たよりにされた毛利君を、すぐに口にする。

ＡＫＣの「よろず相談所」であった。同期生からはうっぷんを聞かされ、下級生からは相談を持ち込まれ、音楽部員とはいっても、音楽は二の次で、対外交渉と部員のめどうをみる役柄に追われとおしだった。それを、一々たんねんに解決し、包容していく人柄は、そでに練られつくした苦労人（高校生にして）といっていいほどだった。

天性のものではないが、器用な面もある。努力して、何にでも手を染めていくうちにつくり出された器用さである。だから、いたって多才多芸である。どんな場所にいても、決して場違いを感じさせない。あちこち引っ張り出され、重宝がられるのもそんなせいだ。

彼の人生哲学は「敵を作らない、だれにも好かれる人間になる」ことだった。そうした考えを、高校時代から着実に踏まえていくのは、なかなかできるわざではない。

音楽の面でよりも雑務に追われたＡＫＣ生活のうちでは、記憶する人も少ないＡＫＣ二代目の男声クヮルテット（水野俊、浅井、若林、毛利）のベースとして、たった一度の公演がある。そして、これは、当時のＡＫＣ部員でさえきけない、歴史的な演奏？だった。

趣味も多いが、その中でもカメラと俳句は得意。彼にいわせると「ほととぎす派のカメラ」であり、麦星（俳号）の俳句である。

この十月二十八日に、坂出時代に知った南野節子さんと結婚。相変らず忙しい毎日だが、昔「おれは二十八まで結婚しない」といっていた昭和九年十月十四日生まれの好男子。

Invention

○…今年も異例の「あさいこうぞうからのお願い」を掲載させてもらいました。Vocalize を私物化する考えではなく、ごく個人的な広告のつもりで載せたものです。その点お含みのうえ、多数の方のご協力…いや、ぜひ会員の方に、一言ずつ書いていただきたいと希望しています。

○…とにかく、忙しい年の暮れ、そのときになって、ハッと来月が 50 号であることに気づいたのです。そうしたら、あれこれプランが浮かぶやら、これまでの一号一号のことが思い出されるやら、われにもなく興奮して、幾晩かは眠れませんでした。りっぱな 50 号を出したい…この私の執着は、私紙「かさくるま」を 49 号でストップさせた無念さからもきているのでしょう。以前「かさくるま」を読んでいてくれた皆さんには、きっとこのが気持ちわかってもらえると思うのです。

○…お忙しい年末なのに、クリスマスのつどい、50 号記念、プロフィルのことなどで、いくつか皆さんに無理をいうことでしょう。どうかあしからず。寸暇を私たちのヴォーカライズのためにおさきください。私は、50 号をいまから期待しています。

1960.12.11（日）

VOCALIZE

号外

ＡＫＣヴォーカライズ機関紙　　編集　浅井幸三

第五回クリスマスうたのつどい
開催ご案内

旭丘高校音楽部の出身者と在校生を結ぶ恒例の「クリスマスうたのつどい」は、今年で第五回を迎えることになりました。忙しい時期ではありますが、みんなが時間を都合しあって、楽しい一日を送りたいと思います。よろしくご出席たまわりますよう、お願いとともにご案内申し上げます。

記

とき　十二月二十五日（日）
　午後一時三十分～五時

ところ　旭丘高校　音楽室

かいひ　①金百円（茶菓費に充当）
　②交換用クリスマス・プレゼント（品物です。百円程度のものですが、手製のものを特に歓迎。食品は不可）は、必ずご持参下さい。

れんらく　当日の参加、不参加を同封のはがきで十二月二十二日までにお知らせ下さい。希望があったらつけ加えて下さい。

以上

十二月十一日

主催　旭丘高校音楽部・
ＡＫＣヴォーカライズ

下半期行事プラン

旭丘高校音楽部出身者の有志による集まり、ＡＫＣヴォーカライズの、三十五年度下半期の主催・後援行事と主要企画はつぎのとおりです。（予定）

◇第五回クリスマス・うたのつどい
　12月25日(日)1時30分　旭丘高校
◇ＡＫＣ新卒業生を送る会　＝後援＝
　二月
◇新卒業生を励ますヴォーカライズのつどい　三月
◇招待席Ｃ
　33回＝大阪＝　ＮＨＫ交響楽団　1/29
　34回＝名古屋＝ＮＨＫ交響楽団　2/3
　35回＝名古屋＝歌劇「リゴレット」　3/23
◇発行物
　Vocalaize 50号（特別号）1月1日
　51号　2月1日
　52号　3月1日
　53号（ＰＲ版）3月15日
　54号（特別号）4月1日
　ヴォーカライズ歌集(Ⅰ)　12月25日
　ＡＫＣ資料集(Ⅰ)　2月15日

詳細は、逐次発表します。

クリスマスのつどい

毎年、卒業生側の参加が非常に少ないので、在校生側から不満の声が出ています。せっかくの機会なのに、そしてまた、卒業生と在校生の親しさを増すための企画なのに、肝心の「人」がいなくてはお話にもなりません。

皆さん、それぞれに用があり、出にくい事情もわかるのですが、準備する者、受け入れ側の気持ちもくんで、ぜひご出席下さいますよう、あえてオネガイします。そして、童心にかえって、大いにさわぎ、うたいましょう。みんな仲間なのですから。

おねがいしまーす

同封したはがきは、クリスマスのつどい出欠連絡、コーラス（近況のみに限りません。気楽にお書きください）、Vocalize50 号にあたってのことば、浅井幸三のプロフィルに一言、その他連絡事項、を書くように用意してあります。

締切は 12 月 22 日（木）ですが、郵便が全般に送れておりますので、できるだけ早くご投函下さい。

また、毎回、返送される率が五割にも満ちません。経費を有効にするためにも、必ず、ご返事をお願いします。担当は森本副会長です。

原稿を求めています

第 50 号（一月号）を迎える Vocalize では、50 号を記念してのいろいろな記事を募集しています。これが実現すれば、少なくとも 12 ページになるはずです。（締切 25 日）

［50 号に寄せて］　お祝いのことばもうれしいには違いありませんが、どう読んでいるか、これまでのこと、今後の方向など、お寄せくだされば幸いです。

［プロフィル（浅井幸三）］　直接には掲載しませんが、その中からピックアップして一本にまとめます。一つには、49 号まで一人で編集した、彼への「わるくち」のプレゼントのつもりもあるのです。

［私たちの夢・新春放談会］　ヴォーカライズの夢を、お正月らしくハデに語り合おうという座談会です。出席者を募集中です。

［コーラス］　いつもはがきに書いていただいているものです。紙上に掲載することをあらかじめご了承下さい。

［私の好きな詩］　詩一編を推薦して戴き、それについての小文（四百字以内）をお添え下さい。

Invention

○…「Vocalize」49 号には、クリスマスのつどいの案内は往復はがきで、と書いてありますが、49 号の発行が遅れたため、ごらんのとおり、号外を発行することにし、はがき代の節約を図りました。ご了承ください。

○…50 号で、いままでの編集者であるワタクシ（浅井幸三）のことが、ちよくちょく紙上に出る関係もあって、私は第 50 号の編集から手をひくことにしました。代わって、森本副会長、神藤、川村両委員が、名トリオぶりをみせてくれることになりましたが、なにしろ初めてのこと、皆さんの積極的なご支援をお願いします。……と同時に、私でなくてもできることを、皆さんにわかっていただけるはずですし、りっぱなものになるだろうと思っています。なお、その間、私はヴォーカライズ歌集に専念することになっています。

○…森本編集長から皆さんへ原稿の依頼がありましたら、どうか引き受けてやって下さい。そして、彼の依頼した原稿とはがきは、森本君あてにお送り下さいますよう。私を通じてお願いするものは、一応私あてにお送り下さい。

（あさい）

1961.1.15〈日〉

VOCALIZE

No. 50

ＡＫＣヴォーカライズ機関紙　　編集　浅井幸三

（うたうことが）

八木　重吉

うたうことが
ないというのか
そのときは
「ああわたしには　うたうことが
　ありはしない」ってうたいなさい
あたりがものさわがしく
なんとなくがさつでたまらないなら
「ああ　なんという　さわがしい　がさつ
きわまるよのなかだろう」っておうたい
つかれて　つかれて　しかたないから
「ああわたしは
なんてつかれたんだろう」っておうたい
こうしてまで
うたいえないときがありましょうか
ただただ
ほかのひとのために
ほかのことのために
うたうことはおよしなさい

―　詩稿「花と空と祈り」より

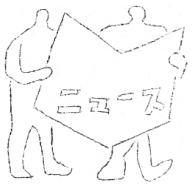
Vocalize
<50 号>

◇コーラス（会員近況）……3
◇ヴォーカライズ新春の夢……6
◇50 号に寄せることば……8
◇はがきに拾う浅井会長のプロフィル…12.
◇「パンの起源」（毛利豊）……14.
◇プロフィル大橋佑子さん（十）…15.
◇プロフィル浅井幸三くん（五）…16.

1月の演奏会

名古屋　◇ＣＭ◆ＰＭ■ステージ

◇田中希代子ピアノ演奏会
　6日夜　市公会堂（労音Ａ）
◆トリオ・ロス・パンチョス公演
　7日昼夜　市公会堂
◇新春ヴォーカル・フェスティバル
　7日夜　文化講堂
◇渡辺弘とスターダスターズ、朝丘雪路
　8日昼夜9日夜　市公会堂（労音Ｃ）
■谷桃子バレエ団「ジゼル」公演
　12,13日夜　市公会堂（労音?）
■小牧バレエ団「カフェ・バア・カンカン」
　公演　バーバラ・スティール、ロイ・
　トバイヤス　客演
　16,17日夜　市公会堂（友の会Ｂ）
◇伊藤亘行門下生アリアとリードのタベ
　20日夜　文化講堂
◆北村英治クインテット　三宅光子
　21日夜　文化講堂（芸文）
◆白木秀雄クインテット、丸山清子
　21日夜　市公会堂
◆ウェスタン・ムード
　24日夜　文化講堂（ロータリー）
◇フランティシェック・ラウフ・ピアノ
　演奏会　27日夜　名鉄ホール
◆ダークダックスとブルーコーツ
　30日夜　市公会堂



この欄はＡＫＣ関係者みんなの近況を知らせ合うためのものです。だれのことでも、どんなことでも、ぜひお知らせ下さい。

◇…第五回を迎えた、恒例のヴォーカライズ、ＡＫＣ共催「クリスマスうたのつどい」は、十二月二十五日午後二時から旭丘高校音楽室で二十四人の参会者によって、楽しくくりひろげられた。遅れてきた者があるからというので、二度も自己紹介をさせられたり（それもヤジの方が多し）「お茶ほしい人」の呼びかけに、うっかり返事をするとお茶をくみに行くことを命じられたり…とかく割りの合わないつどい。突貫工事で間に合わせた「ヴォーカライズ歌集」を片手にコーラスをすれば、「みんな割りにうまくできるじゃないか」と意を強くする下りもあって、うたのつどいらしいところをみせた。

この日最大の呼びものは、ＡＫＣのレパートリー、オペレッタ「影をなくした男」のアリア（？）を初演のさいのペルシャ人鈴木茂君（十二）と再演時の主役（ペーター）朝日裕晶君（十四）の二人が、平山葉子さん（十四）のピアノ伴奏で歌うというアトラクションで、大かっさいを受けた。プレゼントの交換（ソノシートの進出目立つ）を終わって、六時少し前会を閉じた。

参会者つぎのとおり。

[卒業生] 浅井（五）森本（十）神藤、鈴木茂、鈴木道、服部、安井（十二）

＝7名＝

[在校生] 岡嶋、川村、高橋、水野、安田（十三）、朝日、佐藤、平山、村上（十四）、足立、石原、磯貝、大里、太田、加藤久、内藤、三輪（十五）

＝17名＝

◇…十二月から、つぎの七人の新会員（いずれも旭丘高校生）を迎えました。十五期（一年生）の加入はこの方たちが最初であり、十四期（二年生）に男子の会員が加わったこととともに、ヴォーカライズにとってうれしいことです。＝ ＝は出身中学。

・林　茂樹（十三）＝桜丘＝
名古屋市東区徳川町×××
・朝日　裕晶（十四）＝名塚＝
名古屋市西区香呑町×××
・佐藤　征夫（十四）＝名塚＝
名古屋市西区又穂町×××
・足立　靖子（十五）＝富士＝
春日井市八光町×××
・磯貝　文江（十五）＝富士＝
名古屋市北区東杉町×××
・太田　岸子（十五）＝今池＝
名古屋市千種区元古井町×××
・加藤久美子（十五）＝川名＝
名古屋市昭和区楽園町×××

◇…増田容子さん（六期・小倉市在住）は、一月二十二日にご結婚、ふたたび大阪地区に戻られることになった。六期会員では最初のおめでた。＝詳細は次号＝

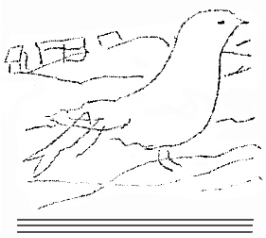
◇…毎日新聞＝名古屋＝夕刊企画「若い芽」（地元音楽舞踊界の期待される人たちを紹介するもの）に、水野俊彦君（六期）が推され一月九日付に掲載された。

◇…委員会主催の新年懇親会は、一月十五日（日）午後、浅井会長宅で開く。

誕生日おめでとう（1月）

・一月二日　佐藤　治江（十一）20歳
・同　七日　佐々　知子（七）25歳
・同　十日　加藤千鶴子（十二）19歳
・同　十六日　水野　俊彦（六）26歳
・同　二十日　近藤　譲子（十三）18歳
・同二十二日　若林　延昌（五）26歳
・同二十二日　安田　良江（六）26歳
・同二十四日　上前昌三郎（九）22歳

CHORUS



－12月中・下旬分
<順不同>

近況…生きてます。
予定…生きるつもり。三月目ざしてがんばる。ただし、遊ぶときは遊ぶつもりだから、誘って下さい。
その他…ヴォーカライズで合唱しませんか。「浪人を励ます会」するべし。

鈴木　道郎（十二）

テストが終わったかと思えば、息つく間もなくクラスマッチ。私はもっぱら応援の方で、飛び上がって喜ぶやら、はらはらするやら、奇声を発するやら、毎日クタクタで帰宅です。（応援で疲れるなんて、われながらぜいたくな話ですけれど）
　ところでわが音楽部、テスト、クラスマッチと、約二週間の空白状態です。そろそろ声を出したくなりました。荘厳な教会音楽、とてもすてきです。

平山　葉子（十四）

ここのところ、バカに忙しくて、ずっと四時間残業の連続。おまけに最後の出勤日である二十九日の夜に宿直。皆が「よいお年を」といそいそと帰っていくときに、ポカンと会社に残らねばならぬつらさ。アア、たれか知るこの悩み。いかにチマンロック（つまり、ロマンチックでないということですナ）な僕にも、これはあまりにもチマチマのチマンロックすぎるという一席。はいお粗末。

松沢　暢夫（六）

相変らず、朝から晩まで笛と取り組んでいますが、いつも笛に負かされてばかり。
　来年は音楽にますます悩まされるでしょうが、それが生きがいでもあります。ケンカのできる間に、大いにケンカをしたいものと思っています。

若林　延昌（五）

書くことはたくさんあると思うのですが、どういうわけか、まとまってくれません。とにかくヴォーカライズの皆さんよ、「こんにちは」…「さようなら」である。

横橋　貞雄（十二）

寮のクリスマスが十八・十九日。十八日はキャンドルサーヴィス、十九日はパーティー。二十日は学校でクリスマス礼拝。午後メサイア公演。これで今年の学校もおしまい。二十二日に帰省します。
　今年ももうあといくらもないのかと思うと妙な気持です。卒業論文というやっかいなものが、もうすぐそこまで来ていますでしょ。いさかか面くらっています。
　今年はまたまた、みなさまに申しわけないことをしましたから…来年は少しはましな人間になれるようにと思います。
　一月は十二日より授業が始まります。お正月だというのに宿題（？）をいっぱいかかえています。タスケテクダサイっていたいくらい。

園部　靖子（十）

ＡＫＣヴォーカライズに参加するようになり、初めて矢野さんより機関紙49号をいただいたのが十二月十六日でした。何もよく知りません一年生ですが、音楽部の部員として、またヴォーカライズの一員として、りっぱに成長していきたいと思っています。先輩の良いご指導をおねがいいたします。

磯貝　文江（十五）

浅井　幸三（五）

・一九六〇年の記録…
七月三十日、私は26歳になりました。しかし、ことしも独身でした。残念なことに「候補者」すらみつかりませんでした。（それでいいのだ、と喜んでくれた人もいました。…オゴってもらえなくなると大変だからだそうです……言った人は身に覚えがあるでしょう）相変らず映画と音楽会と本とで、給料は消えました。それに交際費…。つくづく考えるに、やはり「結婚の条件」を具備しない生活ぶりだったようです。
・一九六一年の見通し…
七月三十日、多分私は27歳になりましょう。そして独身、候補者なし、というぐあいで十二月三十一日になるはずであります。
悪いことに、この年も病弱でありましょう。そうでなかったら、私はきっと、ことしよりいろいろな仕事ができるでしょうが、天二物を与えず、といいます。だから私の目標は見当たりませんし、転勤させられないかぎりは、無事平穏、一九六〇年と似た毎日を送ることでありましょう。

川村　朋子（十三）

三年間なじんできた美しい？「部室」ともあと二カ月ばかりでお別れかと思うと、とっても寂しい気がする。あのちいちゃな三号室に二十人も、よくも入ったり出たりしたものだ。楽しかったクラブ活動は、いろいろな思い出として私の心に残るだろう。オバチャンになっても。
ＡＫＣは近ごろ元気がないようですが、もっと心から楽しめるクラブになるように、クラブ員の活躍を期待します。

永井　充（八）

十二月六日～十二日
伊豆半島一周して東京へ遊学
二十四日～二十九日
赤倉スキー（中京商業）
正月三日～八日
赤倉スキー（市短）
スキーで暮れ、スキーで明ける！
雪の山は恋人　走れ若い心よ
ヤー、ヤッホー、ヤー、ヤッホー！
お金がいっぱいほしい。いろんないいもの、いっぱい買いたい！
写真屋さんは忙しい。

桜山　崇子（七）

帰ってきてちょうど一月。毎日全く同じくりかえしで、少々マンネリです。ちょうどクリスマスイブに東京で仕事がありますので、ひとっ走り行ってきます。往復の旅費その他で、プラスマイナス０より少々マイナスになりそうですが、楽しい仕事らしいので楽しんできます。お正月は日帰りでどこか（奈良か京都）へ遊びに行くつもりです。あまりよく働くと、むしょうに遊びたく、変ったところへ行きたくなるものです。
今、おいしい食物の作り方の研究にこっています。歯のない老人向き、育ち盛りの、放っておいたら御飯を七杯も食べ、肉を三百グラムくらいペロッと食べてしまう連中向き、その他モロモロのお料理です。

世古伊都子（六）

東響の招待をいただき、会員であったことが忘れられていないようでしたから安心しましたが、こんな人が六回生にいたのかしらと思われる人が多いと思います。来年もどうかよろしくお願いします。

鈴木　茂（十二）

寒くなって野球ができないので残念。相変らず元気。今、夕食を食べようとしているところ。

安田　軍二（十三）

今ごろは、大学入試のために机にへばりついておるべき時期なのに、楽天的というか、聖人のあきらめの境地に似ているのか、切実感が少ない。ノイローゼになるやつがうらやましい、なんて考えることもある。

アア、手紙を期限までに出さねばならないこのつらさ。文筆の才なく、字はへた、はがき一枚を前に、三、四時間も頭をひねっているこのつらさ。僕にとって、手紙は文明の利器にあらずして、もっともざんこくなものになっている。

高橋　昭弘（十三）

クラスマッチ、バスケットボール優勝。林君と同じクォーターでハチ合わせしようとは思いませんでした。しかも同じ「センター」とは因果なものです。林君にはたいへん気の毒ではありますが、あんなにうれしかったことはありません。ただし弊害も大きかったようです。試験がすんでからずっとバスケットで追われっぱなし。容器の小さい頭のこと、バスケット以外のことはみんなはみ出てしまいました。クラスマッチのすんだ今、はみ出たものを、またもとへ全部おしこむのかと思ってウンザリしています。

このところ、クラスマッチのせいもあってか、精神がタルンタルンにタルンでしまいました。好き勝手なことをしているということと、生活にうるおいがあるということとは全く別で、やっぱり何かに追われているような感じ。朝夕散歩し、土手に寝ころがって秋を感ずるという道郎さんがうらやましい。心にゆとりがほしいとか、生活にうるおいをとか、要するに心の持ちよう次第なんだろうけど。

森本　進（十）

毎日バイトばかりで、少々くたびれました。もうかっていいじゃねェか、といわれる方がありますが、私のようなキャシャな人間には少々えらいのであります。しかしまあ、なんて頭がわるいんでしょうね。中学生にもなって、四七・二十四では、教える方が頭にきます。そのせいか、毎日ねむくてしようがありません、春眠というやつは暁を覚えぬそうでありますが、冬眠は昼間も覚えません。

今年ももうじき終りですが、よくまあ毎日岡崎まで通ったものです。四月～五月はそれでもきちんと間に合うように行きましたが、このごろは、ひどいときは、一時限が終ったころに学校へ着くこともしばしば。それでも出席になってますからオモチョロイ。来年もせいぜい気をつけて遅刻することにします。

今年九月、テノールのビョルリンクが死にました。私は彼の大ファンでありました。たいへん残念です。もしどなたか、戦前のＳＰ盤で、彼の歌う「ジョコンダ」の「空と海」、「ボエーム」の「冷たき手を」をお持ちの方がありましたら、ちょっと貸してください。

返信されたはがきは、23葉にすぎません。あとの42枚はどこへ消えた？至急ご投函ねがいます。

謹賀新年

本年もよろしくお願いします

ＡＫＣヴォーカライズ委員会

在名古屋七委員、在東京、在大阪各一

Vocalize 編集部

永井充、鈴木道郎、伊藤真知子、浅井幸三　ほか委員一同

みんなが手をつなぎ合おう

ＡＫＣヴォーカライズ

新春の夢

皆さん、あけましておめでとうございます。
ところで、皆さんことしの抱負、希望そして夢は、どんなものでしょうね。きっとすばらしい、りっぱなものだろうと思うのですが、ＡＫＣヴォーカライズ新春の夢だってすごいのです。エッ？　たかが夢じゃないか、ですって？
まあ、そう見くびらないで、だまされるつもりでお読みください。もちろん、実現の可能性を、ユメユメ疑ってはなりません…。

一九六一年・手近な夢

…わがＡＫＣヴォーカライズの会員諸兄姉は、もちろん「一九六一年ヴォーカライズの目標」をご存じです。知らないって、おっしゃる方は、モグリじゃないかな。つまり、
。ヴォーカライズ合唱団の結成
。ヴォーカライズ発表演奏会の開催
。ＡＫＣ出身者全員の会員組織化
。支部組織、集会活動の育成強化
という四つの大きな柱がそれです。初耳だ、そんなこといつ決まった……と驚いている人は、きっと忙しすぎて、夢みる仲間に加わるのがおそくなった方たちでしょう。

そうです…。ヴォーカライズにも合唱団ができるのです。旭丘高校音楽部ゆかりの者が期待していた、また当然あって不思議のない合唱団が生まれるのです。いままでだって、つくろうとさえすれば合唱団くらい、すぐできたのに、ワイワイガヤガヤ騒がれながらも耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで、満を持して放たなかった私たちの気持（上からつくられる合唱団ではなく、みんなの盛り上がる声によって築かれる合唱団にしたかったから）が、こうしてやっと実を結ぶのです。

そして秋になります。ヴォーカライズは第一回の定期演奏会を、名古屋市内の○○会場で盛大に開きます。合唱団はぴったりと息の通い合った、みごとなアンサンブルをきかせ、卒業生・在校生合同のオペレッタは盛んな笑いと拍手を呼び、水野俊彦、桜山崇子、若林延昌、金谷京子といったソリストたちも、それぞれ持ち味を生かしての好演をみせて、定期演奏会は大成功のうちに幕を閉じます。

こうしてヴォーカライズの名が、いよいよひろまっていくにつれ、ＡＫＣ出身者は、ヴォーカライズの意義を認識し、会員であることの誇りを感じるようになっていくでしょう。そして、ＡＫＣ関係者は一人残らず会員となるのです。

組織が強化されると、東京、大阪両支部の活動も活発になります。名古屋でも、合唱団の活動とは別に、毎月一回きまって会合がもたれ、その月の誕生者のお祝いも同時に行なわれるでしょう。機関紙「Vocalize」も発行部数が100部をこえ、タイプ印刷になり、ずっと読みやすくなります。

ただし、残念ながら、郵便料金値上げのあおりをくらって、会費がいくぶん高くなりそうな雲行きもあります。

…話が金のことになったので、いっぺんに夢からさめた、とおっしゃるのですか？　それはどうも失礼しました。もう一度やり直しましょう。こんどこそ途中で目がさめないように、少しクスリを強くしますかね。ああ、それと宝船の絵、しっかり持っていて下さいよ。その前に、お茶を一杯のんで、ちょっと一息入れておきましょうか。…さあ、始めましょう…。

…かくして××年後

【名古屋、東京、大阪の三都にヴォーカライズ会館が建っている。いずれも音響効果のよい演奏会場と宿泊施設が付属して建設され、会員の利用に便を与えている。ここ、名古屋の会館事務局では、運営委員たちが新年のあいさつをかわしてのち雑談にふけっている】

（みな年齢、服装など判然とせず……。）

会長Ａ「ことしはどうかな、会員同士の結婚は。去年は七組だったけど」

事務局Ｂ「ぼくの予想じゃ十組ってところでしょうね。それにしても、ひところは、会員同士で結婚すると、以後一人分の会費収入が減るからというので、抑制策をとったというのに…」

（笑い）

副会長Ｃ「去年の暮れ、九州旅行したとき、向こうの音楽ファンが「どうしてヴォーカライズ合唱団はコンクールに出なくなったのか」と残念がっていたけど…」

合唱団Ｄ「いやあ、それはどうも。何しろいつ出ても優勝じゃ申しわけないし、高校の部では旭丘がこれまた優勝の常連というふうでは出にくいからね。それに最近じゃ、一般の人たちは、僕らの合唱団をプロと思ってるみたいだから、いまさらのごとくコンクールに出るのもはばかられてね」

事務局Ｂ「いや、まったく、有名になるってこともつらいものだね」（笑い）

会長Ａ「だけど、この前の名古屋ミュージカルはよかった。毎年毎年うまくなっちゃって、こわいみたいだよ」

副会長Ｃ「何しろ、何から何まで会員の手でやって…その会員が年々ぐんぐんふえてうんと幅もできるんだから、前途ますます有望だね」

合唱団Ｄ「コンクールよりもおもしろいよ。（笑い）自分たちでつくるってことは、とにかく楽しいね」

会長Ａ「おい、Ｅ君、少し休んでお茶でも飲めよ」

編集部Ｅ「印刷部からまだ校正刷りが回ってこないんだよ。困るね実際、二月号が遅れたら、新年号の大好評もフイだから…」

副会長Ｃ「大丈夫、印刷部にはベテランがそろってるよ。それにしても、新年号の海外だより、記事も写真もよかったじゃないか」

編集部Ｅ「ありがとう。実をいうと、あれはずっと昔のアイデアを借りたんですよ。アカペラ時代にあったでしょう、各地の音楽通信というのが…。あれの焼き直しってわけですから、いばれませんね」

会長Ａ「イタリアのＭ君、フランスのＳさん、ドイツのＷ君、アメリカのＫさん、ウィーンのＨさん、等々、ヴォーカライズからもずいぶん海外で活躍しているね」

合唱団Ｄ「写真のＮ君、相変らずうまいし、いいグラビアが続くよ」

事務局Ｂ「そんなことといって、Ｄ君、ことしは合唱団が世界一周したいんと違うかい」

副会長Ｃ「なるほどね、こりゃコンクールよりよっぽどいい」（笑い）

編集部Ｅ「その節は、ぼくも一つ随行記者ってことに頼みたいね」

会長Ａ「ホウ、上手がいるね」（笑い）

・ジリジリジリ…と電話のベル。

事務局Ｂ「ハイハイ、あの賛助会員にですね。けっこうです。会費は年二百円ですが…安いですって、どうもどうも…」

【やっぱり落ちつくところは同じらしいです。…でも、この夢うますぎるかナ。まあいいや、初めにも書きましたっけ。ユメユメ疑うことなかれ、ですよ。楽しみにどうぞ】

―企画・構成　あさい　こうぞう

VOCALIZE　50 号　に寄せることば

昭和三十一年一月、「アカペラ」の代替として初めて発行された「Vocalize」は、同年十一月より月刊態勢に切りかえ、五年後の今日、こうして50号を迎えました。その間、かげになり日なたになりして力していただいた会員の諸兄姉にお礼申し上げるとともに、50号にさいしてお寄せいただいたご好意あふれる「ことば」にも、編集部一同、深く感謝いたしております。

…以下は、お寄せ下さった原稿、はがきによるものです。

トグロを巻き　ハモろう！
―提案します

人間五歳ともなれば、幼稚園にも通い始め、生活態度にも何かの変化を生ずるものです。わがヴォーカライズも、そろそろ変化を生じてもよいころではないでしょうか。

今までに、私たちが会員としてなしてきたこと…それは、送られてきた機関紙に目を通し、たまたま何かの理由で気の向いたとき、はがきを書いて、ついでがあれば投函し、なきゃどうでもよい。そして次に送られてくる機関紙に目を通し…ということぐらいだったでしょう。その機関紙たるや、最近になってやっと原稿が集まりかけてる状態で、そのほとんどは会長の手によっているのです。「彼におっつけとけばなんとかしてくれる」　そんななまけた気分が、私たちの中にありはしなかったでしょうか。

ここで私たちはもう一度考えなくてはなりません。^ヴォーカライズの機関紙なのか機関紙のヴォーカライズなのか^v

創立当時から発行されていたのでしょうが、それはきっと、会を整える（組織とか運営とか…）ための、形式を整えるための、一つの手段にすぎなかったと思うのです。そして本来の目的が機関紙発行にあるのではないと思うのです。ところが、機関紙にたよりすぎてしまって、かえってそれに振りまわされ、機関紙が存在するゆえに、かえって会員がなまけてしまって、近道するつもりのをすっかり遠回りしてしまったのが現状ではないのでしょうか。

伝え聞くところによれば、会長の墓場行きも間近とか。機関紙のことをはじめヴォーカライズのほとんどがすべて彼に任せきっている今、彼にあの世に行かれてしまったら、今の運営に破綻の起きるのは必至です。こんなとき、わがヴォーカライズの組織の弱さをひしひしと感ずるのです。時に、名古屋には四十人に及ぶ会員がいるのです。しかし、年に一度だってその全員が一堂に会する事無く、ごくのんびりと、というよりはだらしなく、何もしないで過ごしているのです。在校生がつまらなさそうに言いました。

「結局、あの人ひとりでやってるんだろう」あの人のやってるのがつまらないのではなく、みんなでやっていないのがつまらないのです。私たちは、機関紙発行よりもほかに、何かを、会員の半分でもよいから、一堂に集まってせねばならないと思うのです。会長が安心してあの世に行ける集まりを、私たちの手でつくらなくてはいけないと思うのです。

機関紙、これも大切です。しかし、何か会員による活動、それに必要を迫られての機関紙発行であると思うのです。順序などというものはどうでもよいかもしれません。しかし、五年もたってるのに、まだ順序の狂ったまま、組織のしっかりでき上がらないままでいる、ということは、悲しむべきことだとおもうのです。

試みに、在校生の会員数を調べてみますと、十三、十四、十五期と下るほど人数は少なくなっていきます。それは、

VOCALIZE　50 号　に寄せることば

ヴォーカライズに魅力がないからです。親しみがわかないのです。ＰＲのせいではないのです。腑に落ちないのです。ヴォーカライズのいましていることが腑に落ちないのです。

私は提案します。

私たちの手で、私たちの合唱団を、ヴォーカライズの合唱団をつくろうではありませんか。老いも若きも、いや若きも若きも、男も女も、一つになってできること、それはコーラス以外の何ものでもないのです。ブームに乗るようでシャクですが、そんなことはどうでもよいと思うのです。歌集もできました。今こそ私たちが歌うときなのです。組織の弱かったのは、私たちが何もしなかったことに原因すると思うのです。

会員諸兄姉よ！　大いにトグロを巻き、大いにハモろうではありませんか。

＜Ｍ・Ｓ＞

都築健太郎顧問

今までは、どちらかといえば、浅井が一人でやっているという感じだった。私費を投じてまでやってきたのに、それを理解する者が少なかった。自分たちの会なのだから、勝手なことをいうときだけはいうがあとは知らぬというのではなく、もっと盛り立てていかなければいけない。しかし、今まで積み重ねてきた実績が、やがてみんなを動かし、よりりっぱな、完全なものへと進んでいくだろうことを疑わない。

（談）

鈴木　道郎（十二）

あまりピンときません。だって、僕が正式に仲間に入ったときには、すでに、存在してたんですからね。でも、ずいぶん、辛抱のしがいのあることですね。それだけに、夢もあるのだろうけれど…。偉業ですね、まさに。夢がみな実現しちゃうんだからすばらしい。

思い出といえば、文化祭の批評されたときのこと。あれは27号。ショックでしたね。何ヶ月も前から勉強をおっぽり出して、炭坑節じゃないけど、朝も早よから夜おそくまで打ち込んだ音楽会も、ああスゲナク片づけられたんじゃね。でもあれはあれで味があると思います。ただ、いつでもそうなんだけど、言いたいことだけ言っといて、そんならどうすりゃいいのか、具体的に指導して下さったら、次の音楽会はもっとよいものになるのだったんでしょうが…。そういった縦のつながりを、うんと深めたいものですね。

横橋　貞雄（十二）

こんな他人行儀なことを言えた柄ではなのだが、「もう50号になっちゃったの」喜びも悲しみも幾年月、長い間、浅井会長並びに諸委員の方々、ほんとうにご苦労さまでした。これからもがんばってやって下さい。

若林　延昌（五）

50号おめでとう。一口に50号といってもここまで来るのには、たいへんなご苦労があったことでしょう。唯一のＡＫＣの縦のつながりとして、会員も協力しなければ、今後の発展もありますまい。一年ごとに上下の幅が広がって行くから、共通な話題がもっと必要になるでしょうが…。

VOCALIZE　50 号　に寄せることば

藤野　絢子（十三）

なにも知らずに入って、クラブとともに三年間。内容をきかれてもいまだにはっきりとしたことは言えませんが、無意味だと思ったことは一度もありません。ということは、この会ぐらい気楽で楽しいものはなかったと思います。私自身、なまけ者ですので、このように義務のない会が、この上なく好きです。こんなことをいったら、文句が方々からでそうですね。デモ、ホントニソウカンジテイルンデス。

松沢　暢夫（六）

私は、50 号だからとて、どうとも思わない。49 号の次に 50 が来て、その次に 51 が来るのは自明の理だからである。だから、50 号でお祝いするなら、49 でも 51 でもしなくてはならない…と、ひねくれた考え方をするのが僕という人間である。しかし、ひねくれていない人でも、なぜ 50 号がありがたいのかと、改まってきかれたら、さて…困るであろう。

…これが、へそまがりの私が 50 号に寄せることばである。

川村　朋子（十三）

（自分の今まで不協力であったことは認めて）　会員全員の協力のたりなさを改めることが、これからのヴォーカライズに必要であろう。音楽を楽しむ人の集まりですから、もっと合唱できたらいいことだと思います。ぜひともヴォーカライズ合唱団が実現されるように、私自身も協力したい。そして、浅井会長が主になるヴォーカライズでなく、会員が主となるヴォーカライズにしよう。

浅井　幸三（五）

とても、ほめられた歩みではなかった。つまずいたり、ころんだり…。そして、そのたびに泣いたり、わめいたり、怒ったりしていた一人の男のことが、いやでも頭から消えないのです。

50 号…それはヘンテツもない、長い道程のうちの一つの標識にしかすぎません。けれども、その標識には、地図を見るだけでは得られないものもあります。やはり、実際に歩んでみなければ味わえないものなのです。

これからも道は続きます。長い長い、とっても長い…。ヴォーカライズの道もそのように長く、そのうえ、歩くほどに仲間がふえ、いつしか大きな舗装路に出られるように…ボクはそう祈っているのです。

鈴木　茂（十二）

卒業生・在校生の唯一の連絡機関として続いてきたことにただ感嘆いたします。しかもどうにか順調な活動を続け得るようになり、有意義な機関として認識されるまでに至らしめた浅井さんの根気は、学ぶべきことだと思います。しかし、50 回の発行を迎えるまで、ときどき難航させてしまった僕たちの態度を反省し、次から休刊のないよう、また、もっと良い機関となって拡大し、活動を続けていけるようにするのが、私たち会員の責任であると痛感いたします。

永井　充（八）

友だちの少なかった、家を離れた東京、大阪の生活の中で、定期的（不定期の方が多いけど）にやってくる唯一の郵便物。一目でわかる封筒と印刷。私にとって 50 号とはうれしい。感慨無量といいましょう！

VOCALIZE　50 号　に寄せることば

桜山　崇子（七）

まずはおめでたいことです。これを機会にもっともっと歌いますように。それも、ことばのない発声ではなくて、りっぱなコーラスになりたいものです。

この紙上で年寄りも若いのも（たしか一番上と下では九つくらい違うはずですね）お知り合いになれました。もっとたくさん、親しくお近づきになりたいものです。

森本　進（十）

50 号…なるほどおめでたいことにはちがいありません。しかし、私たちはここで少し考え直さなければなりません。今までの機関紙ヴォーカライズは、ほとんど会長一人が四苦八苦してつくったものです。ＡＫＣヴォーカライズは、旭丘音楽部出身者及び在部者みんなの会です。だから、機関紙も会長の私紙であってはなりません。皆さん、ペンをとりましょう。そして、みんなの機関紙にしましょう。少なくとも、返信用のハガキはみんな集まるようにしましょう。

高橋　昭弘（十三）

50 号刊行おめでとうございます。一口に 50 号といっても四年以上なんですもんね。編集委員の方（特に浅井さん）は大変だったと思います。僕は 50 号の間の歴史的な曲折、発展を知りませんが、最近読み始めた者として、ちょっと一言。

今のヴォーカライズは、会員相互の有機的なつながりが全くないように思います。ＡＫＣヴォーカライズという機関があって、そのために Vocalize という機関紙があるんだと思いますけど、今のは何だか Vocalize という機関紙のために、ＡＫＣヴォーカライズという組織があるみたいなふうなんです。具体的にどうするかについては、前にチョット聞いたヴォーカライズ合唱団をつくるという話、ぜひ実現させたいと思います。やっぱり音楽部出身者の集まりなんですから、歌をうたうことによってつながりをもっていくというのが、最上の方法だと思います。ヴォーカライズ自身はおもしろくて、たいへんいいと思いますが、それを一層生かしていくためにも、バックにそういうはっきりとしたつながりの場があるといいと思います。

石も叫ばん

―二人目が書く編集後記―

◇…「あろがき」欄を明け渡したため、おしゃべりな「石」がさけべなくなり、声なき声を黙殺されたら困るので、割り込みを策しました。

◇…私の、本号において割り当てられた仕事が印刷。いやでも原稿を見るわけです。そこで私は、「浅井会長のプロフィル」特集に強硬に反対したのです。ところが、つれない森本編集長は「ぼくの権限で載せる」と……。ひどい人があるものです。その意趣晴らしに、彼の編集した組み方とちょくちょく違えたり（わざとです）しましたが、あきらめてくれることでしょう。

◇…次号からは伊藤真知子さん（十四）が編集に参画して下さいます。よりよいものになると、ご期待いただいていいと思うのです。

◇…私のことを「墓場行き」だの「ゲームに強い」だの「頼みごとの名人」だの、いろいろいっていますが、その真実性は知る人ぞ知るです。勝負事がきらいで、人にものを頼むのがへたで、ごくごく人間的な男なのに……。おぼえてろ。

（あさい）

プロフィル・はがきに拾う・浅井　幸三・はがきに拾う・プロフィル

十二月の返信用はがきに、浅井会長のプロフィル欄がありましたが、そこに書かれてあったものを、ここでご紹介します。ただし、あまりにも私的なものは割愛させていただきました。

なお、16ページに加藤幽香子さんの書かれた正式なプロフィルを載せました。

（編集部）

その悪口　賛辞　その他　もろもろ　←

やさしくて、おとなしくて、かわいらしくて、（チョット無理して）十人並みのいい男（？）で、後輩思いの先輩！これくらい一生懸命無理してほめれば、ほんのたまには、「タンポポ」でコーヒー一杯くらいオゴッテくれないこともありません。

やさしすぎて貫録がない、おとなしすぎて気味が悪い、細すぎてこわれそう…。これくらいけなされたくらいでは、てんで怒らない（と思う）ところは、やっぱり人間ができています。

^高橋　昭弘v

一口で……

・心からご信頼申し上げております。

^横橋　貞雄v

「自信」のあるような…

何事にも人並み以上の「自信」を持っている男である。そして同時に「自信」のない人間である。

^松沢　暢夫v

人を見んとすれば、飼い犬を見よ

私と浅井会長とは、ずいぶん共通項が多いそうでありますので、ちょいとばかりいいにくいのであります。

浅井会長は私と競争して病気をします。しかし私とちがうところは、その病気がたいてい決まっていることです。彼はたいていカゼか、気管支の病気ですが、私のはいろいろですから。浅井会長は何でもよく食べるくせに、あまり胃腸をこわしたことはないのです。浅井さん！ことしはお互いに健康に気をつけることにスベエ。

浅井会長は目の開いている間歯、けっしてじっとしてられない人です。勤務表をみて、きょうはいるなと思って出かけても、たいていいないそうです。いるとしたら、目は開いていないのです。一体どこに行くのでしょう。旭丘にもよく行きます。デイトにしては相手がいないそうですし…（いるかも知れませんけど、私はまだお目にかかってません）彼は何もすることがないと、映画館へ眠りに行くという変った人です。家でねればタダなのに、わざわざやかましい映画館へ行かなくてもよさそうです。もっとも映画館は地震のようにがたがゆれないから、いいのかもしれません。（浅井さんの家は、汽車の通るたびにゆれるのです）

浅井会長はゲームは何でも強いようです。将棋でもトランプでも、とにかく、ごまかされてるみたいに不思議に強いのです。まだ麻雀でたたかったことはないのですが、これもどうせごまかされそうです。どうして、ああガメツク勝つのでしょうね。

浅井家のワン公は、ものすごいファイターであると同時に、フェミニストであります。その点は飼い主によく似ているのでしょうか。

^森本　進v

不思議な人です…お化けです

・不思議な人ですネ。お化けみたい。
・いろいろ試みることが好きなようです。すばらしい精力をもって、人に「そんなにひまなのかしら」と思わせるほど欲ばって、「忙しい、忙しい」って言ってるんだから…。
・どんな女性と結婚するのかナ。興味ある問題ですナ。
・その節は大いに祝福しましょうヤ。

＾鈴木　道郎＞

口は悪いが遠慮がち…

いうまでもなく、その活躍は万人が認めるでしょう。…口の悪い鋭い批判のしかたの反面、人に遠慮しすぎるほどのところもあり、実をいえば「わからない人」という気がするけど、まじめな、たよりがいのある人であることは確かだ。欲をいえば、もっとスポーツマンになって太ってほしい。

＾川村　朋子＞

何をかいわん！

何をかいわん、神様である。

＾安田　軍二＞

ガンチャン　老ゆ…

浅井氏についての思い出を一つ。

彼はガンチャン（といっても、今の若い方にはおわかりにならないでしょうが、「鐘の鳴る丘」の精薄児です）のマネがたいへん上手で、しばしば一号室をにぎわしたものです。それが今は喘息だとか何とか、あまりにも簡単に年を取りすぎたようですね。

＾桜山　崇子＞

作戦勝ち…

実の腕のある人である。この春に、一年間ヴォーカライズ退団を申し入れたところ、快く（？）ご承知下さった。後、毎月機関紙を下さり、やっぱり逆戻り！浅井会長ならではの作戦です。しかし同時に考えられたのは、この人があるかぎり、この会は盛んであれると…。

＾藤野　絢子＞

まんがにしたい…

度の強いまんまるいふちのめがね
漫画に出てきそうな一つの典型的なサラリーマンタイプ
目立ちはしないが忘れられない存在

＾永井　充＞

時々こわい…

いつもやさしい浅井さんにも、ときどきこわいところが現われます。

＾神藤　敏子＞

統率力がほしい…

会長としての統率力をみがいてほしい。僕の初めて知った音楽部の先輩でした。

＾鈴木　茂＞

ねばりと執着…

よくいえばねばり強く、悪くいえばあまりに執着しすぎるところ…彼の長短所ではなかろうか。

＾若林　延昌＞

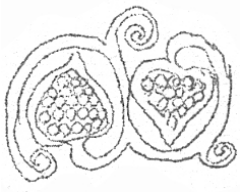
最も真実公正なるプロフィル？

運動がきらいで病弱なのが最大の欠点。短気でむら気で、そして優柔不断なのが、そのつぎの弱点。奇妙に人を愛しやすく、他面人を信じきれないでいる矛盾さも、やはりほめられないところ。ロマンチックで涙もろいくせに、とても冷たい表情で押し通せる「人の子らしくない」点もよくない性格。そしてもっともいけないのは、あすに何の希望も夢も持たないこと…。

しかし、また、自分のすべてに反発して憎悪し、責めながらも、その自分をだれにもまして愛している気弱な男でもあります。

＾浅井　幸三＞

パンの起源



毛利　豊

話は数千年前、ところはエジプト…。話をする前に、主要食糧の変遷の段階をわけてみると

第一段階　雑炊食
第二段階　粥食
第三段階　平焼食
第四段階　パン食

となる。すなわち、この話は第三段階平焼食のころの話である。平焼きというのは、今のせんべいのようなもので、当時は、小麦粉を水でねって生地を作り、薄く延ばして、火の中で焼いた石の上にのせて焼いたものです。

ある日、いつもと同じように、召使いの若者が、夕食の準備のため、平焼きを作りはじめました。午前中臼でひいた小麦粉を水でねって、平たい型にして…。そこまではよかったのですが、彼の若者、つい眠くなり、そのまま、そこで居眠りをしだしてしまった。何時間たったか、はっと目がさめて「大変大変、夕食に間に合わない」とあわてて焼石の上に例の平焼きの生地をのせようとみると、いつもの生地、いや一時間ばかり前に自分が作った生地とは全然違っている。その生地は空気でも入れたように、ふっくらとふくらんでいるではありませんか。驚いた若者、「ああ失敗した。主人に叱られる」戸落胆したがあとの祭り。

新しい平焼きを焼くにも小麦粉はなし、やむをえず、そのふくらんだ生地を焼石の上にのせて焼き、オズオズ主人の前に持っていった。案の定、ひどく叱られましたが、主人も一口食べたとたん、昨日まで食べていた平焼きとは全然違った、おいしい味。それに、ふっくらとした柔らかさに、思わず「これはうまい」といって、さっそく学者に知らせて、どうした失敗がこの平焼きを作ったかと、いろいろ研究し、結局、空気中の野生酵母（酵母菌）が、召使いが居眠りしている間に、平焼きの生地の中に入って発酵し、炭酸ガスを生産した結果とわかり、現代のパンの起源を作ったのです。

同じころ、ブドウ酒の製法も、同じような失敗で発見されたとか。

私の好きな詩

八木重吉　〈うたうことが〉

浅井　幸三

「好きな詩」というより、私は、八木重吉という詩人のすべてが好きだ。これほど素朴にうたい、神を信じ、人を愛し、自然に親しんだ詩人も少ないだろう。そうした生活からにじみ出た彼の詩は、じかに人の心を打つ純粋さに満ちている。

恵まれないうちに、早く世を去った彼の、多くの詩がそうであるように、この詩には題がついていない。そしてまた、この作品は最近知られた詩稿のうちの一つなので、有名な詩でもない。「うたう」ということが、必ずしも「歌」をさしてはいないにしろ、この詩は、私を励ましてくれる。

高校時代…まだ詩作していたころ…の私は、八木重吉の詩境に一歩でも近づこうとした。それは、しょせん及ばぬ望みでしかなかったが、そのころの私の作品に、彼の影響がはっきりと残り、そしていまもなお、彼が、彼の詩が、私に多くのものを与えていることを否定できない。…かれがあまりにも素朴で美しく、私はアクの強い人間だったから…。

招待席 C

ヤンソンス指揮
バドゥラ=スコダ　ピアノ
東京交響楽団演奏会
（十二月十六日・文化講堂）

十二月の招待席C（第52回）は、アルウィド・ヤンソンスを指揮者に迎えた東京交響楽団の演奏会を取り上げた。

ちょうど二年前、所も同じ文化講堂でのヤンソンス指揮の東響の好演を知るファンが詰めかけ、会場は満員の盛況、ピアノ独奏者にパウル・バドゥラ=スコダという好組み合わせも人気をあおっていた。

演奏は期待にたがわぬ盛り上りを見せ、スコダの理知的な皇帝協奏曲、しみじみとうたわせたヤンソンス得意の悲愴など、一九六〇年の名古屋音楽界の終幕を飾るにふさわしいものだった。

参会者はこの好演に、心を満たされて家路についたが、この日はほかに毛利（五）、水野俊（六）、平山（十四）、浅井（五）各会員の姿もみられた。

参会者
招待者　世古伊都子（六）
〃　矢野　公子（十四）
編集部　村田　陽子（七）

プロフィル

県立女子大学合唱団指揮者
大橋　佑子　さん
（おおはし　ゆうこ）
（10期）

丸い顔に大きないたずらっぽい眼。そこにはいつも笑みがたたえられ、どんな時にもけっして明るさを失わないで、周囲になごやかなふんいきをつくり出す名人、それが大橋さんである。

どんな人に対しても、適度のユーモアをもって気軽に話すところから、先輩にも後輩にも親しまれている。型にはまったきゅうくつなことはきらいで、なかなかはっきりと自己の立場を示すことのできる人で、とにかくウェットな性質ではない。そうかといって、けっしてドライに割り切ってしまうのでもなく、よい意味での近代的感覚のする人である。

ＡＫＣ時代から大変に有能な人で、何をやってもそつがない。ソリストとして、指揮者として、マネージャー（相談役のこと）としておおいに活躍したが、特にソリストとしては定評があった。また、この当時より、ヴォーカライズには特別の感心を寄せ、卒業生と在校生のかけはしとなってあれこれ奔走した功績は高く評価されている。

現在、県立女子大の英文科に在学中の彼女は、ここの合唱団の常任（？）指揮者である。合連の当番校であることも手伝って、目下もうれつに忙しいらしい。何しろこの合唱団は賛助出演を引きうけることが多いので、それだけ大橋さんも忙しい。いかに元気のある彼女でも、ネコもシャクシもほしいところかもしれない。しかし彼女は相変らず楽しそうである。たとえ一日でも二日でも、少し暇でも見出そうものなら、すぐに彼女の姿は名古屋から消える。というほどの旅行好き。ますます落ち着ける時間はなくなる。忙しくても楽しければ大変けっこうである。大活躍の彼女に脱帽しよう。

家族はご両親だけであるが、いわゆる「ひとりっ子」らしくないところが大橋さんのいいところ。生まれはたしか大阪で、名古屋弁と大阪弁をまことにうまく使いわける。ためしに大阪弁で話してみたまえ。彼女はきっと流暢な大阪弁で答えてくれるだろう。

プロフィル

みんなの知っている顔

浅井（あさい） 幸三（こうぞう） 君

（五期・会長）

細い小さな筆跡で、一面ぎっしりと書きこんであるハガキを、ポストの中に見つけた時のわたくしの顔をご想像下さい。例によって例の如く甚だやっかいな事を頼んできたのに間違いありません。そこで、ぽこんと一つポストを叩いて八つ当りします。そして風にのってどこかへ行けばいいと思うのが、彼の手紙です。中身は大てい「ある事をお願いしたいのだけど、きっと引き受けて頂けると思っています…」皆様、呉々もご用心を。もっとも、その手紙には「自分でもずうずうしいと思ってますが」と、先手を打ってあるので、つい素直に受けとって、面倒な返事も三度に一度は出す事にしています。

あまり丈夫そうでない、細い体のどこから、あんなに面倒くさい事を考える元気がわいてくるのか、不思議です。ほかに苦労がないからでしょうかね。

（いえ、あるかもしれません）

（ないしょばなし）彼はこいびとの事、考えてるのでしょうか。もし、考えているとしたら、彼は聖徳太子の髪の毛ぐらいえらいのかもしれません。だって、一度に両方の事を考えるなんて、わたくしには思いもよらないことですからね。

とにかく、アサイコウゾウくんが、やっかいな事を考えるひまもないほど、すてきなだれかさんが現れて呉れないと、わたくしが困るのです。

音楽会に行くと、必ずどこからか現れてにやにやしているのが彼です。わたくしはさっと辺りを見回します。でも彼のまわりには、いつも知らないおじさんがうろうろしているばかりでがっかり。どなたか見つけてあげて下さい。

彼の言うのには「僕の悪口を書いてほしい」のだそうですが、それは無理です。本当の悪口を書けるようだったら、今まで十年間もの長い間、つきあってはいませんよ。

（ゆか）

デジタル注・本文はカタカナ。読みにくいので変更。

Invention

「Vocalize」も今月でめでたく50号を迎えた。そこで「記念号」として、正月向きにずっしりとしたものを予定したのだが、原稿が集まらず、あまり大きなものにはならなかった。しかし、回収されたはがきによって、ずいぶんにぎやかな号になったのはうれしい。

今月はごらんのように、これまでヴォーカライズのために献身された浅井会長のプロフィルを特集した関係上、浅井会長は編集に一切関係していない。本号に限り編集責任は森本副会長がとることになった。

編集は大変めんどうな仕事である。浅井会長はよくもまあ毎月やってきたものだと、感心するやら、あきれるやら。しかし、原稿がないのは何ともさびしい気持である。はがきが三分の一しか戻ってこないのもおもしろくない。これでは会長がぐちをこぼすのも無理はないと、痛感した次第である。

六一年の新春とともに、Vocaliseも50号を迎えたのである。50号をさらに前進するための敷石として、この上に、押しても引いてもびくともしない建物を建てたいものである。

（森本・神藤・川村）